昭和53・54・55年度

高槻市文化財年報

昭和56年12月

高槻市教育委員会

はじめに

昨今、歴史を書きかえるほどの重要な発掘調査が全国各地で多くおこなわれ、人々の注目を集めているところであります。本市においても文化財保護を進めるために、昭和４９年に文化財保護条例を制定し、今日まで各種の文化財の調査を実施してきたところであります。これらの調査活動で得られた資料の一部は、調査報告書、各種の資料集等で、刊行してきたところです。また一方、歴史講座の開催、発掘調査地での現地説明会等、文化財保護の重要性を市民に強くうったえてきたところでもあります。

特に、昭和55年度は、市立埋蔵文化財調査センター開設5周年にあたり〝郷土を知る文化財展〟を催し、市民が気軽に学習できるように、土器づくりの体験実習をはじめ、弥生時代住居の復元、文化財の展示等の記念行事を実施し、多くの市民の参加を得てきたところです。

本書は、昭和５３年から昭和５５年までの埋蔵文化財の発掘調査をはじめ、土器づくり、弥生時代住居の復原等の文化財保護事業の概要を収録しております。この三年間の概略報告ではありますが、今後の文化財保護活動の研究にそれぞれの場で生かしていただければ幸いです。

なお、この文化財年報の刊行にあたっては、多くの関係者の方々にご協力をいただき、心より厚くお礼申しあげます。

昭和５６年１２月１日

高槻市教育委員会

社会教育課長　森　健一

目　次

Ⅰ　文化財保護啓蒙事業 …… 1

1. 昭和５３年度 …… 1
2. 昭和５４年度 …… 1
3. 昭和５５年度 …… 1
4. 弥生式土器の製作実験 …… 3
5. 弥生時代住居の復元 …… 15

Ⅱ　埋蔵文化財の調査 …… 17

図　版

ＰＬ．1　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．2　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．3　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．4　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．5　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．6　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．7　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．8　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．9　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．10　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．11　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．12　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．13　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．14　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．15　弥生式土器の製作実験
ＰＬ．16　弥生時代住居の復元
ＰＬ．17　弥生時代住居の復元
ＰＬ．18　弥生時代住居の復元
ＰＬ．19　埋蔵文化財調査位置図
ＰＬ．20　埋蔵文化財調査位置図
ＰＬ．21　埋蔵文化財調査位置図
ＰＬ．22　埋蔵文化財調査位置図
ＰＬ．23　大蔵司遺跡
ＰＬ．24　大蔵司遺跡
ＰＬ．25　天神山遺跡
ＰＬ．26　奥坂古墳群
ＰＬ．27　昼神車塚古墳
ＰＬ．28　安満遺跡
ＰＬ．29　安満遺跡
ＰＬ．30　安満遺跡
ＰＬ．31　梶原寺跡、梶原埴輪円筒棺
ＰＬ．32　大蔵司遺跡遺構図
ＰＬ．33　大蔵司遺跡遺構図
ＰＬ．34　安満遺跡遺構図

Ⅰ　文化財保護啓蒙事業

1.〔昭和53年度〕

(A) 現地説明会

昭和53年11月11日　昼神車塚古墳発掘調査現地説明会

(B) 文化財実習

昭和53年12月15日～昭和54年2月27日　弥生土器製作実験　（協力、市立日吉台小学校ＰＴＡ歴史クラブ）

(C) 展覧会

昭和53年11月3日～17日「第2回民俗文化財展」（市民会館G階）

(D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

個人　3,046名

団体　1,467名（23団体）

合計　4,513名（延12,378名）

2.〔昭和54年度〕

(A) 現地説明会

昭和55年　3月23日　安満遺跡（高垣地区）発掘調査現地説明会

(B) 歴史講座

1. 前期（歴史と文化講座）
   - 昭和54年6月1日　「古代の高槻」　原口正三氏（島上高校教諭）
   - 昭和54年6月8日　「高槻城と高山右近」　脇田　修氏（大阪大学助教授）
   - 昭和54年6月14日　「淀川をめぐって」　高取正男氏（京都女子大学教授）
   - 昭和54年6月22日　「伝統芸能にみる高槻」　宇津木秀甫氏（地方芸能研究家）
   - 昭和54年6月27日　「万葉の世界」　井村哲夫氏（園田学園大学教授）
2. 後期（歴史講座）
   - 昭和55年2月8日　「語りかける中世の高槻」　水野正好氏（奈良大学助教授）
   - 昭和55年2月15日　「歴史地理からみた高槻の特色」　小林健太郎氏（滋賀大学教授）
   - 昭和55年2月22日　「原始古代の高槻」　田代克己氏（帝塚山短期大学助教授）
   - 昭和55年2月29日　「幕末動乱期の高槻」　酒井　一氏（龍谷大学教授）
   - 昭和55年3月7日　史跡見学会　岩谷進阡氏（郷土史家）

(C) 展覧会

昭和54年11月3日～9日「第3回民俗文化財展」（民俗文化財資料室）

(D) 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

個人　2,465名

団体　1,521名（12団体）

合計　3,986名（延　16,364名）

3.〔昭和55年度〕

(A) 歴史講座

1. シルクロードをたずねて
   - 昭和55年6月17日　「長安の古代と現代」　原口正三氏（立命館大学講師）
   - 昭和55年6月24日　「黄河を越えて」　町田　章氏（国立埋蔵文化財センター）
   - 昭和55年7月1日　「仏教美術の宝庫・敦煌」　小田義久氏（龍谷大学教授）
   - 昭和55年7月8日　「木にかかれた文字」　大庭　修氏（関西大学教授）
2. シルクロードをたずねて
   - 昭和55年10月14日　「桜蘭王国の幻影」　堀川　徹氏（京都大学）
   - 昭和55年10月21日　「遊牧民とシルクロード」　原山　煌氏（四天王寺女子大学）
   - 昭和55年10月28日　「ササン朝ペルシアの銀貨とビザンチンの金貨」　岡内三真氏（京都大学）
   - 昭和55年11月1日　「シルクロード特別講演会」　野口篤太郎氏（ＮＨＫシルクロ

ード特別取材班チーフカメラマン）

・昭和55年11月4日　「正倉院宝物とシルクロード」　関根真隆氏（正倉院）

・昭和55年11月11日　「トルファンの史蹟」田辺昭三氏（京都市埋蔵文化財研究所）

3.　シルクロードをたずねて

・昭和56年2月10日　「玄奘と中央アジア」桑山正進氏　（京都大学）

・昭和56年2月17日　「シルクロード周辺の遊牧民」　松井　健氏（京都大学）

・昭和56年2月24日　「新疆ウイグル人」浜田正美氏（京都大学）

・昭和56年3月3日　「モンゴル帝国の原像」　杉山正明氏（京都大学）

(B)　文化財実習

・昭和55年9月22日～10月26日
土器製作体験実習（一般募集）

・昭和55年10月1日～10月9日
弥生時代住居復元　（協力　大西ナカ氏、谷郷三郎氏、高槻市森林組合）

(C)　展　覧　会

・昭和55年10月17日～10月26日
「郷土を知る文化財展」

・昭和55年10月30日～11月4日
「古代土器再現展」

・昭和55年11月22日～11月24日
「第4回民俗文化財展」（民俗文化財資料室）

(D)　市立埋蔵文化財調査センター見学者数

個人　4,329名

団体　1,197名（9団体）

合計　5,526名（延21,890名）

4　弥生式土器の製作実験

弥生式土器がどのようにして製作されたか、明確でない。そこで今回、これまでの考古学的・民族学的成果をもとに、土器の製作実験を試みた。実際には、中国西南部少数民族や東南アジアにおける伝統的技法によるところが大きい。とくに焼成については、従来窯等の構築物の発掘例がないところから、平地での「野焼き」及び「覆い焼き」（後述）の2方法によっておこなった。以下、概略を記す。

Ⅰ　土器の成形

1.　工具　土器表面の痕跡からハケ目原体（ハケと略称、以下同様）、ヘラ原体（ヘラ）、クシ原体（クシ）、叩き板等が考えられているが、叩き板以外、形状・材質については推測の域を出ない。今回の実験では、民族例等を参考にして、各種の工具を製作、使用した。

〔ハケ〕半月形の薄板である。長さ約12㎝、幅約4㎝、厚さ約0.5㎝で、材質はスギ。外湾部は両面を削って刃をつけてある。使用するにしたがって、軟い春材部が磨滅し、ハケ目が再現される。常時水に漬けておいて使用する。

〔ヘラ〕薄くそいだ竹の一端を湾曲させ、刃をつけたもの。幅約2㎝。このほかナイフや2枚貝の貝殻も使用した。〔クシ〕施文の項参照。

〔叩き板〕茨木市東奈良遺跡出土品を参考にした。形状は羽子板様で、長さ約27㎝、幅約5.5㎝、厚さ約0.6㎝。片面に幅約0.3㎝、深さ約0.2㎝の溝を、0.3㎝間隔で8条彫りこんだ。材は出土例では槇であるが、スギを用いた。常時水に漬けておいて使用する。溝の深さ・数を違えたものも若干用意した。

〔製作台〕成形は、木箱・机の上でおこなった。製作上の便宜と、回転台に代る木の葉をおく平滑面を得るためである。これらのほかに、布・鹿皮・バケツを用意した。なお、ハケ・ヘラ・叩き板は、中国雲南省では陶梳・竹刀・陶板と称されている。

2.　粘土　沖積地・洪積台地からそれぞれ採取した粘土を、いったん乾燥・粉砕し、水でこね3カ月ほどおいたものを用いた。色調は前者が暗灰褐色、後者が灰褐色である。川砂を適宜混合し、30分以上こねてから使用する。

3.　成形　a前・中期の壷・鉢・甕、b高杯、c後期の甕、d庄内式の甕の順で記述する。

a壷・鉢・甕　まず拳大ほどの粘土を丸め、裏返した木の葉の上で叩きのばして厚さ約1.5㎝の円盤とする。

ついで直径3㎝ほどの粘土紐をつくり、これを台上で押し、あるいは叩きのばして、厚さ0.7～1㎝の粘土帯とする。そしてこれをさきの粘土円盤の上面へ圧着し、押しのばして外面を接合する。内面接合部は、直径1～2㎝の粘土紐で補強してから、なめらかに接合する。そして粘土帯上縁をなでて平滑にし、2段目の粘土帯の接合面とする。

2段目以上の粘土帯接合は、内面の補強は要しない。外面は上方へ、内面は下方へ押しのばす。このとき、器厚を均一に、また器面の凹凸をととのえるために、ハケを用いる。こうして順次粘土帯を積み上げていくが、自重による変形を防ぐため、2～3段ごとに30分間ほど休止する。とくに壷の場合は慎重を要する。また、強くハケをかければ、表面がやや乾燥した状態でも容易にプロポーションを変化させうる。接合面が固まったときは、水ないし泥状の粘土を塗布して接合する。

口縁部は外側へ開くため、頸部～口縁部屈曲部位を1本の粘土帯で形成する。すなわち、やや厚い粘土帯の上端をつまんで引き出すようにして、屈曲部位をつくりだすとともに口縁部粘土帯の接合面とする。そしてしばらく時間をおいてから、開裂を避けるため軟かめの粘土帯を接合して、口縁部・端部を形成する。ハケでととのえた後、端をヘラで切削して完整な端部とする。

以上のようにして成形した土器は、全面をハケで整えたのち、そのままあるいはナデ・横ナデもしく

はヘラ磨きをおこない、最後に施文をほどこして完成する。ただし壷の内面は、成形後一気に調整できないことが多いので、粘土帯接合ごとに丁寧に調整する。このため、下半は縦方向、上半は横方向のハケ目ないしナデがほどこされることになる。

b高杯　まず柱状部、ついで裾部、杯部の順でつくる。丸めた粘土帯あるいは柱状粘土塊を穿孔して円筒をつくり、木の葉の上へ直立させて据え、外面にハケをかける。しばらく待ってから、裾部の成形にうつる。

幅狭の粘土帯をやや外反させながら円筒上端に接合し、裾部をつくっていく。そして円筒下端から裾端部まで、外面を一気にハケ調整、裾部内面もハケをかけ、端部をととのえて柱状部～裾部の成形がおわる。この段階で30分以上放置しておく。

裾部が固ったら、これを反転して杯部の成形にうつる。上端を水で濡らし、直径1㎝ほどの粘土紐を接合し、この上縁を横へつまみ出して杯部粘土帯の接合面をつくる。屈曲部外面は細い粘土紐で補強しておく。そして順次粘土帯を、時間をおきながら接合していく。1段ないし2段目の粘土帯接合の段階では、底部中央は開口している方が作業がやりやすいが、これ以後は杯部の変形を防ぐため充塡しておく（円盤充塡）。

口縁部成形・調整についてはすでにaで述べた。ハケをかけたあと、表面が半乾燥の状態になるのを待ってヘラ磨きをほどこし、最後に施文・裾部穿孔をおこなって完成する。穿孔には竹管を使用した。

c後期の甕　土器の表面が半乾燥の状態でも、叩き板で叩きしめることによって、成形中と同等もしくはそれ以上に器壁が軟化する。これに内側からハケをかければ、容易にプロポーションが変化する。これが整形技法としての叩きである。

一方、後期の甕は、粘土紐を数段積みあげては叩いて成形する工程をくり返してつくられている。このいわゆる叩き成形技法による製作について述べる。

直径1～2㎝の粘土紐を積みあげて、直径約3㎝、高さ約5㎝の円筒をつくる。内外面ハケ調整後、外面を叩き板で叩く。この作業は手の甲を、器面内側に当て、片手で叩き板を手前へ引くように叩きつけていく。下から上へ叩いては土器を回転して、叩く作業をくり返す。逆円錐形に叩きおわったら、これを木の葉の上に据え（底に粘土紐を巻いて安定させる）ハケを内側にかけて形をととのえる(第1段階)。ここで、 30分間以上おいて硬化を待ち、次の粘土紐積みあげにうつる。

第2段階は、やはり粘土紐を2ないし3段積みあげ指で押しのばして接合し、ハケ調整の後、叩きしめて成形する。ここで、体部下半までできたことになる。以後、体部中位・上位・頸部を同様に成形していくわけだが、各段階とも粘土紐2ないし3段からなり、次の段階との間に30分以上時間をおいた方がよい。各段階の接合部は、接合部の下方にゆるやかな稜ができることがあるが、個々の粘土紐接合部は、判別できない。

さて、肩部の叩きがおわった段階で、端部を外方へ引き出すように折り曲げ、口縁部粘土帯の接合面をつくる。口縁部の成形はaに既述した。こうして成形・調整が一応完了するが、口縁部がある程度硬化したら、底部付近を調整しておく。

d庄内式の甕　庄内式甕の壊れ方には、粘土帯・段階成形を連想させるような、規則性はない。このことは、庄内式甕の成形技法が、Ⅴ様式のそれと異なっていることをうかがわせる。そこで試みたのが、以下に記す方法である。粘土は東大阪市立博物館の御好意で、同博付近の「生駒西麓の粘土」を使用した。この粘土は、たいへん粘りが強く、砂を混ぜなくとも変形しにくい特徴がある。

まず、直径2～3㎝の粘土紐を積みあげて直径7～8㎝、高さ15㎝程度の円筒をつくる。 内外面ともハケをかけてから、叩きにうつる。叩き板は溝が細かく、重量も重いものを使用した。

叩きは、3回くらいに分けておこなう。1回目の叩きは、器厚を均一に薄く、その分器高・口径を拡張するようにおこなう。砲弾形に叩きおわったら、台上に据え、内側にハケをかけて15分以上放置す

る。この段階で器厚1.5㎝、高さ15㎝余りである。

2回目の叩きは、主に腹径を拡張するように、下方から上方、上端から下方へと叩く。強くハケをかけて、腹径を拡張し、プロポーションをととのえる。3回目の叩きは、下方から上方へ連続的に、腹径の拡張と肩部をつくりだすようにおこなう。およそこのときに全体のプロポーションが決まるが、底部はまだ平底である。器厚は0.5～1㎝程度である。

叩きがおわったら、上端（頸部）をヘラで切削し、口縁部粘土紐を接合する。直径2～3㎝程度の太いものを1本接合し、これをハケで薄く、かつ外上方へのばしていく。このとき肩部も内側から拡げられ、頸部を形成する。拡張した口縁部をヘラで切削してととのえ端部をつくる。ここで肩部～体部上半にハケをかけ、凹凸を修正する。

口縁部が硬化するのを待って、底部を叩いて尖底とし、底から放射状にハケをかけて調整、倒立させて静置する。

器面が半乾燥になった時点で、内面のヘラ削りをおこなう。ヘラ削りした面は凹面をなしていることから、湾曲させた木・竹製のヘラを試してみたがシャープさに欠け、うまくいかなかった。そこで湾曲させたナイフ、スプーン等を試した結果、ヘラ削りを再現することができたが、このような金属製の工具が土器製作につかわれたとは考えにくい。ヘラ削りのヘラの要件は刃部が薄く滑らかで、かつ湾曲していることである。これを満たすものとしては、金属器以外に骨角器があるが、なかでも貝殻は何ら加工をほどこすことなしにさきの要件に適合する。そこでアサリ等2枚貝の貝殻を用いて、外側から掌で支持しつつヘラ削りをおこなうことによって、良好な結果を得ることができた。掌で支持しつつおこなうことで、器厚を確かめながらしかも最終的なプロポーションの調整をおこなうことを得る。その結果ヘラ削りによって、器厚を0.3～0.5㎝程度にすることができた。重量でいえば約$\frac{1}{3}$ほどを削り落したことになる。

体部内面のヘラ削りがおわったら、つづいて口縁部内面もヘラ削りをおこない、最後に口縁部内外面を横ナデする。端部外側を強く横ナデすることで、端部の立ちあがりが再現される。

なお、平底を叩いて最終的に尖底とするには底部周辺を叩けば充分であるが、叩きを腹部下方までおこなえば、容易に腹部からなめらかにつづく丸底を得ることが可能である。このときには、内面および外面に放射状ではなくアトランダムにハケをかけることを要する。もちろん丸底は分厚い底部を外側から削ってつくることもできるが、叩きを用いた方が簡便かつ確実であった。

以上、土器の成形・調整について述べた。ただし施文とくに櫛描文・クシについては問題がある。先端を刻んだ板・ヘラ様のものを数枚たばねたもの・サルボウ等の2枚貝などを試してみたが、いずれも決定的でない。またハケについても、樹種の違いによってハケ目の太さも変ることが判明した。樹種の選定すなわち、地域環境の変化と読みとることもできよう。今後追究の余地がある。

Ⅱ　土器の焼成

今回の実験では、先述したように「野焼き」と「覆い焼き」の2方法によって焼成をおこなった。ここで「覆い焼き」としたのは、土器を燃料でくるみこみ、その上を粘土で覆って焼く方法である。中国雲南省傣族にみられる方法だが、灰をかぶせるなど類似のやり方は東南アジア各地でおこなわれている。

1.　乾燥　仕上げおわった土器は、1週間ほど蔭干しする。底まで白っぽくなって、叩くとコンコンという音がするのが目安である。

2.　予熱　焼成に先立って土器を80～100℃に熱して水分を追いだし、急激な温度変化による破損を防ぐ工程である。

まず、高さ80㎝程度の棚をつくり、土器を倒立させてならべムシロで覆う。こうして下から遠火で2～3時間焙る。この間に焼成の準備をしておく。土器を叩くとカンカンと高く澄んだ音がするようになれば、焼成にうつる。

3. 野焼き　平地に、径2m、厚さ0.3mほどに薪・木の枝などを積みあげてベースとする。予熱の済んだ土器をベース上に横倒してならべ、木の枝などで覆い（厚さ約0.3m）四方から同時に点火する。

4. 覆い焼き　平地に薪をならべ、2m×1.5m程度の床をつくる。この上に割木片を積みあげ（厚さは周辺で0.3m、中央で0.2m程度）、ベースとする。そしてこの上に土器を横倒しに、熱いうちにならべ、カヤ・ワラ等で覆う。今回はカヤ・ワラの2者を用いた。便宜的に前者をカヤ窯、後者をワラ窯として記述する。両者とも手順は変らないが、ワラ窯の手順を示す。

まず土器の上に横方向にワラを積む。ついで縦方向、再び横方向に、それぞれ厚さ10～15cmに3層積みあげる。側面は、10cm程度の厚さで立てかけるようにワラをおく。こうして全面をワラで覆ったのち、軟かい粘土で被覆する。粘土は厚めに塗りつけるという程度だが、間隙がないように注意する。

全面を粘土で被覆したのち、四隅に点火口を開け、火種を投入して点火する。上面に4～5カ所の煙出し孔を開けて、点火口は粘土でふさいでしまう。実験では、予熱済の土器をベース上にならべてから点火するまでに約30分を要した。

5. 野焼きの温度変化　温度は、素焼き管を土器付近に挿入しておき、管内に設置したパイロメーターで測定した。したがって土器の表面温度に近似した値を示していると考えられる。

測定の結果は図1に示したように、点火後約40分で最高温度730℃前後に達し、以後温度は降下しはじめた。この時点で周辺部に薪等を投入し燃焼維持につとめた結果、600℃以上は約1時間、400℃以上は約2時間程度維持したが、木片投入をやめると温度は急激に低下し、点火後約7時間で常温に復した。

6. 覆い焼きの温度変化　点火後約1時間で内部温度80℃、窯表面はところどころ白く乾き、ヒビ割れを生じる。このとき、煙出し孔付近の燃焼が比較的進行しているのでこれを塞ぎ、他の部分に煙出し孔を開ける。

表1　焼成に要した燃料

	薪	枝	木片	カヤ	ワラ	計
野焼き 上 下	20 30	50 40		20		160 Kg
カヤ窯 上 下	15		15	30		60 Kg
ワラ窯 上 下	15		15		40	70 Kg

表2　焼成の結果

	焼成(個)	破損(個)	完形(個)	破損率(%)
野焼き〔予熱無〕 〔予熱済〕	23 77	18 3	5 74	78 18
カヤ窯〔予熱済〕	48	0	48	0
ワラ窯〔予熱済〕	46	0	46	0

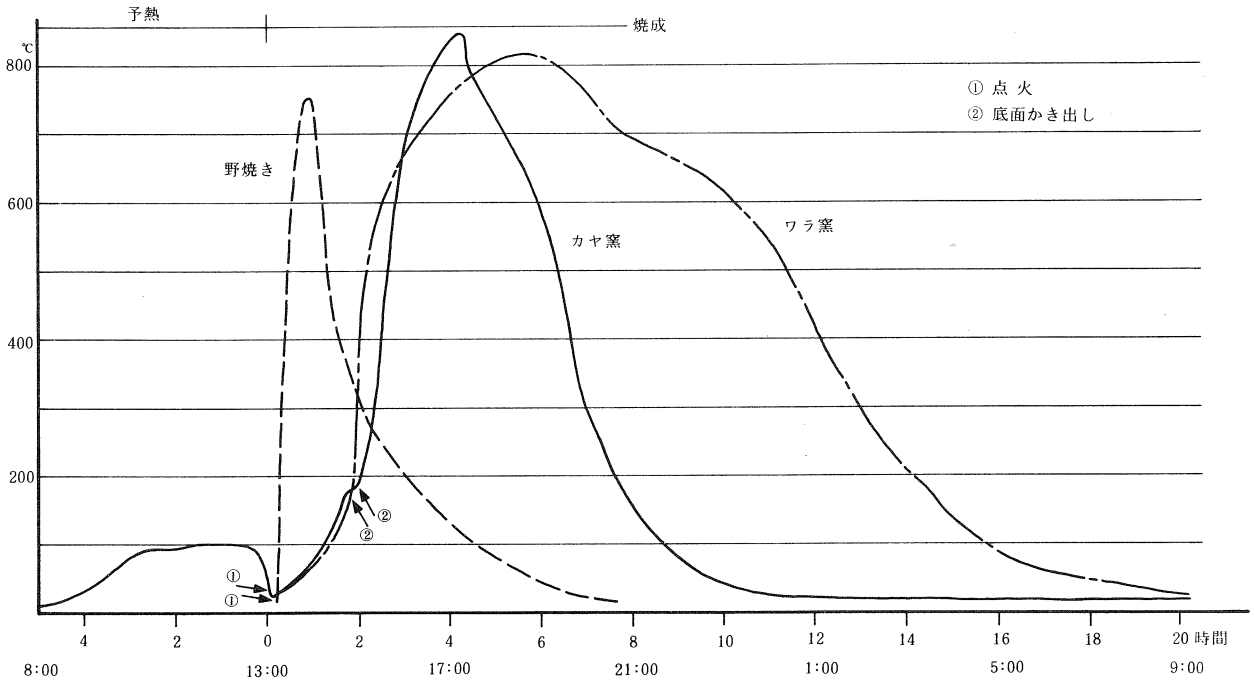


図1　焼成時の温度変化

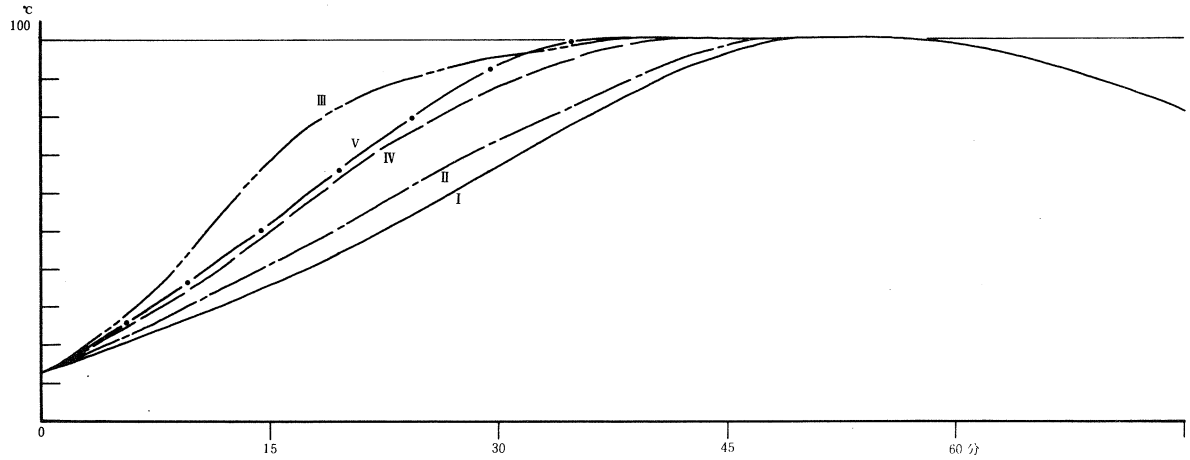


図2　炊さん中の温度変化

点火後約2時間で内部温度は180～200℃に達し、表面全体がヒビ割れはじめる。この段階で、側面の底辺を欠きとる。つまり、蒸し焼きの状態になっているところへ空気を吹きこんで一気に燃焼させるわけである。以後の温度上昇は激しく、底辺開口後約30分で約500℃、2～3時間で最高温度に達する。ワラ窯の場合開口後3時間で約800℃、カヤ窯の場合2時間で850℃であった。

この段階を過ぎると、煙は減少し、ベースの薪、上面のワラ（カヤ）ともに熾の状態になる。内部温度は降下しはじめるが、その度合は野焼きに比べゆるやかである。600℃まで降下するのにカヤ窯（点火後）約6時間・ワラ窯（同）約10時間30分、400℃まで降下するのには、それぞれ約7時間・約12時間を要した。

内部温度が400℃まで降下した段階に至って、ようやく被覆粘土直下のワラ（カヤ）が赤熱・灰化するのが認められた。同時に、窯全体がくずれて陥没しはじめた。この状態から内部温度が常温まで降下するには、なおカヤ窯で5時間、ワラ窯で8時間を要した。

以上、覆い焼きに要した時間はカヤを用いた場合で約12時間、ワラを用いた場合で約20時間である。

7. 土器のとり出し　野焼きは当日、覆い焼きは翌朝とり出した。

野焼きの経過についてはさきに記したが、ここで若干補足しておく。点火後約2時間で全体が熾の状態になった段階で、焼成状況を確認した。周辺部にあるものは赤褐色、中央部のものは黄灰色から淡灰褐色の色調を呈していた。中心部は酸欠のためか蒸し焼き状態で炭素を吸着してしまい黒色ないし黒灰色を呈していたため、別に焚火を設け再加熱して炭素をとばしてから熾の上に戻し、自然冷却を待って取りあげた。

覆い焼きについては　翌朝取りあげを開始した。まず熱を受けて灰白色ないし赤褐色に変化した粘土を取りのぞき、ついで草木灰をかき出すと、鮮やかな赤褐色を呈する土器があらわれた。粘土が崩れ落ちて土器と接していた部分、あるいは床面と接していた部分で黒斑がみとめられた。しかし、そうした部分の多くは、若干白っぽい色調を呈するにとどまった。この状況はカヤ窯・ワラ窯の両者とも同様であった。

野焼き・覆い焼きの焼成結果は、表1に示した。焼成初期における温度のコントロールが、破損率に大きく影響していることがわかる。

8. 焼成に要した燃料　野焼き・覆い焼きそれぞれに要した燃料は、表2に示した。ただし、両者の燃焼状況は大きく異なっている。

野焼きの場合、前項でも記したように、中央付近は不完全燃焼を起こし、大量の炭が残ったまま、鎮火してしまった。一方、覆い焼きの場合、ベースの薪・木片は周囲の5～10㎝を残して底面まですべて灰となった。また上面・側面のカヤ・ワラも、完全に燃えて灰になっていた。被覆に用いた粘土はほとんどが生焼けながら変成し、部分的には土器化していた。床面は、前日の小雨にもかかわらず砂地のためか、厚さ1～3㎝の焼土層が形成された。とくにワラ窯の場合、床全面がくっきりと赤く焼けており、周囲との境界付近は灰を混えた焼土がみとめられた。このようなことは、野焼きではみられず、わずかに完全燃焼した付近で極く薄い焼土がみとめられただけである。

Ⅲ　復元土器の観察

1. 野焼き焼成の土器　このなかには、冷却途中に再加熱して表面の炭素を除去したものがあるが、ここではそれ以外のものをとりあげる。

今回の実験では燃焼状況が一様でなかったため、土器の焼き・色調に甚しい違いが生じた。周辺部・中央部にかかわらず、薪が完全燃焼した付近では、色調は赤褐色～淡赤褐色を呈し、叩くとコンコンとにぶい音がした。比較的軟質である。土器同士あるいは燃えきらなかった薪に接していた部分は、灰褐色を呈していた。床に接していた部分も同様である。黒斑はみとめられなかった。

一方、薪が燃えきらずに炭が残った部分では、色調は淡褐色～暗灰褐色を呈し、軟質である。土器と土器あるいは薪・床に接していた部分は暗褐色斑ないし黒斑がみとめられた。ただし土器の相対する2カ所というような対応関係はみとめられない。

また、蒸し焼きの状態にあった土器は、冷黒色ないし暗褐色を呈し軟質である。土器同士の接していた部分は、炭素がまわらなかったためか暗褐色を呈し、むしろ周囲より明るい色調であった。再加熱したものでは、冷黒色のものが淡赤褐色ないし淡褐色に、暗褐色のものが淡赤褐色に変化したのがみとめられた。

以上の3者は、内面はいずれも淡褐色を呈していた。断面は、表面の色調にかかわらず中心部は赤褐色を呈する。また、色調が暗いものほど軟かく、たやすく手で砕くことができた。

2. 覆い焼き焼成の土器　カヤ窯・ワラ窯とも土器の焼き・色調に差異はみとめられない。ただし胎土によって、洪積台地のものより沖積地の粘土を用いたものの方が、赤味がかっている。また高槻の粘土が全体として赤褐色～橙黄色に発色したのに対し、東大阪の粘土は茶褐色に発色し地域性を明確にしている。

こうした胎土による違いは全体的なものだが、焼成時の位置に対応して、部分的に微妙な色調の違いを生じている。被覆粘土が崩れ落ち土器に接していた部分は、灰白色または黒色を呈している。このとき粘土と土器の間に灰があれば灰白色、直接接していれば黒斑になっている。土器同士が接していた部分は灰白色ないし黄灰色、土器が床面に接して木炭が残った場合には黒斑がみとめられた。また、窯の表面に近い側はにぶい赤褐色、中心・底面に近い側では黄色がかった赤褐色～橙黄色を呈していることが確認できた。胎土中に極く少量混入していた黄褐色粘土粒は、暗赤褐色に発色していた。なお内面は一様に灰白色を呈していた。

焼きはすべて極めて良好で硬質、叩くとカンカンと金属音を発する。

3. 焼成前後の変化　前項まで主として焼き・色調について記したが、ここでは法量・器面等の変化をとりあげる。

焼成前に1週間程度蔭干しすることは前述したが、この間に水分が蒸発して土器全体が収縮する。この度合は成形時の粘土の硬軟・混合した砂の多少によって違ってくるが、大まかにいって重量で10～15％、長さで5％前後小さくなる。このため、成形時の粘土紐の硬さが極端に違っていたり1日以上時間をおいて接合したりすると、ヒビ割れを生じて把手が取れたり胴が真二つになったりする。粘土のこね方が不充分な場合は、縦に割れ裂けることが多かった。器壁も薄くなるので、小石がとび出すこともあるが、ハケ・ヘラ磨きをほどこしたときはこのようなことは少ない。

乾燥した土器を焼成すると、粘土鉱物中の結晶水が失われて水に溶けない本来の「土器」になる。この過程で、重量は10％、長さが5％前後、小さくなる。全体として成形時の80％程度に縮んでしまうことになる。このときにまた破損が生じることがあるが、これは焼成初期の急激な温度上昇のため粘土中の混合水や空気が膨張して器壁を破壊するのであって、焼成前の小さなヒビ割れが直接の原因ではない。

器面の状態は、焼成前後で大きく変らないが、器壁の収縮によって砂粒が強調される。横ナデ・ハケ・叩き等の微妙な凹凸はとくに強調されることはなかった。おおざっぱにいって、乾燥した時点の形状がそのまま保持されている。

Ⅳ　復元土器による煮炊きの実験

焼成した復元土器を用いて、実際に玄米・キビ・アワを炊さんした。

図2・表3以下に示すように、実験は甕5個を使用した。平底のものはそのまま地面において周囲から、丸底のものは石で支えて下から加熱した。燃料は割木を用いた。それぞれの内容物は表3に示したとおりである。水量は内容物より2割増にした。

炊さん中の温度変化は図2に示した。容量・内容

表3　内　容　物

	玄　米（カップ）	キ　ビ（カップ）	ア　ワ（カップ）
Ⅰ	6	3	−
Ⅱ	6	−	3
Ⅲ	−	−	3
Ⅳ	−	3	−
Ⅴ	15	−	−

表4　浸　出　率

	容　　量	調　　整	残　量（a）	浸　出　率
Ⅰ	6 ℓ	内外面ナデ	5.2 ℓ	13.3 %
Ⅱ	4 ℓ	内外面ハケ	3.6 ℓ	10 %
Ⅲ	1.7 ℓ	外面叩き	1.3 ℓ	23.5 %
Ⅳ	3 ℓ	内外面ナデ	2.5 ℓ	16.7 %
Ⅴ	8 ℓ	内外面ナデ	6.9 ℓ	13.7 %
A	2 ℓ	外面叩き	0.8 ℓ	60 %
B	3 ℓ	内外面ハケ	2.1 ℓ	30 %

（a）19時間放置後
A　素焼き、カメ
B　素焼き、ツボ

物・加熱の度合が一定でないため単純な比較はできないが、下から加熱できる丸底の方が、対流も起こりやすく熱効率はよいようである。器厚の厚薄による効率の差は分明でない。

さて、炊さん前後の土器の変化について検討する。外面は煤・タールで覆われてしまい炎があたった部分は変色する。煤・タールのつき方は一様でない。タールは最大腹径以下に多く、胴部上位には少ない。煤も最大腹径付近、ついで口縁部外面に厚く付着していた。平底・丸底ともに炎のあたる底部付近には煤・タールの付着はみられなかった。注意されたのは、内面に内容物がこげついた部分では、外面の煤・タールがとんでしまったことである。こうした状況は出土例によく符合する。また、内面に糊状のデンプン質がこびりついたまま放置すると、土器の表面が薄く剥離してしまい、ハケ・ナデの調整痕はわからなくなってしまったのは意外だった。

表4は、土器の透水性（浸出率）である。A・Bは焼成後そのまま、Ⅰ～Ⅴは炊さん実験に使用した後のものである。明らかに、1回だけの炊さんにもかかわらず使用後の方が、浸出率は半減している。これは内面にデンプン質、外面にタール・煤が付着したためと考えられる。また、内外面の調整によっても差がある。とくに、外面を叩いたままの場合に浸出率が高い。ハケとナデでは、ハケの方が浸出率が低い。ナデ調整が水を用いて表面を滑らかにするのに対し、仕上げに相当するハケ調整は半乾燥に近い状態で押しつけるようにおこなうため、表面の多孔性が減じるのであろう。この意味では、実験はしていないがヘラ磨きも有効であると思われる。

なお、以上の実験に使用した土器は、いずれも覆い焼き焼成のものである。

Ⅴ まとめ

今回おこなった土器の製作・炊さん実験は、従来の知見をもとにした推定復元であり、その意味で弥生式土器の再現でない。とはいえ、少なくともその技術的側面の解明について、こうした実験的手法は有効であると考える。今回の実験で用いた技法・技術についてはなお多くの修正の余地があると考えられるが、ここではこの間の経験的事実・反省をふまえ製作ないし生産上の問題点を述べるにとどめ、よって将来の検討にまちたいとおもう。

弥生式土器がロクロ成形でないことに、異論はない。しかしそれが「巻きあげ」によったものか「輪積み」によるものか、検討の余地がある。「巻きあげ」を、粘土帯をラセン状につみあげて器壁をつくる方法、「輪積み」を、粘土帯でつくった輪をつみあげていく方法とすれば、今回用いた方法は両者いずれにも厳密には妥当しない。Ⅰの粘土帯を積みあげるという表現は、ある長さの粘土帯を下の器壁に接合しつつ1段を積み、余分はそこで切りあるいは再び足して、粘土帯1段ないし3段を積みあげた時点における上縁は常に水平にしておくことを指す。成形途中のある段階で、ラセン状の巻きあげによって上縁が傾斜していたり、あらかじめ下の口径にあわせてつくった輪ないし円筒を接合するというのは合理的でないし、製作上（作業の熟練度の差はあるとしても）二度手間である。接合の際には幅・厚さだけでなく長さ方向にも粘土帯は変化するのであるし、器形・対称性を確保するうえで、上縁が水平であることは重要な要件である。粘土帯を1段ごとにとめていく方法と輪積みが結果的にあまりかわらないというなら、むしろ「巻きあげ」は「粘土帯(紐)を接合しながら器壁をつくっていく方法」、「輪積み」は「あらかじめつくった粘土帯1段以上の高さの輪ないし円筒を積みあげて器壁をつくる方法」というべきである。この輪積み技法は、Ⅴ様式について分割成形技法として示唆されているけれども、土器内外面の不整合は巻きあげによっても生じうるのであって、さきの理由からも、円筒形の部分品の接合がおこなわれたとは考えがたい。Ⅰ－3ｃで示したような工程によっても同様の結果を得ることから、Ⅴ様式においてもそれまでと同様の断続的な粘土帯（紐）巻きあげによったとみるべきである。すなわち、少なくとも弥生式土器においては基本的に段階成形技法 ── 巻きあげは断続的に時間をおいておこなわれ、しかもその都度器形・器面の調整をおこなう ── であって、この点において、縄文式および庄内式以後と異なっていると考える。この場合、叩き手法のなかには段階成形技法と庄内式以後の一体成形技法の両者が存在し、前者から後者への発展の過程として、Ⅳ様式以後の変化をとらえることができる。

また、今回は「回転台」のかわりに木の葉を使用した。「回転台」の存在如何についてここではふれる余裕もないが、実験の結果、木の葉でも土器の成形・調整・施文において何ら不都合はなかったことを記しておく。2枚の木の葉を表合せで板の上におき、この上で土器を回転させて横や上からみながら接合・ハケ調整をおこなうことで、比較的容易に器形の対称性を得ることができた。内面のハケ調整のときは外面を掌で支え、外面のハケ調整・叩きのときは内面を手の甲で支えながらおこなうことで、たやすく所期の曲面を得ることが可能である。このことは製作時の姿勢にも関わることだが、具体的には地面に皮や板を敷き、胡座ないし中腰で作業したと考えている。この姿勢であれば、器形の調整もたやすいうえにハケ調整等の方向も、自ずと出土例のようにならざるをえない。ヘラ削り・ヘラ磨きの段階では、器壁は半乾燥の状態であるから、膝でかかえて作業ができる。施文も、施文具は水漬して用いると考えるのが自然であるから、器面が半乾燥であっても容易におこないうる。

おそらく土器製作には、敷皮（粘土をこねるためにも必要）、若干の板材（工具あるいは敷板）、木の葉（落葉ないし常緑広葉樹）程度のものしか必要としなかったのであろう。ただし、ハケなどの工具の樹種・木取り・形状は今後検証していかねばなら

ない課題である。

なお、今回の実験における製作時間を記しておく。こねあげた粘土を用いて、高さ36㎝・口径33㎝の甕の場合で約8時間、高さ27㎝・腹径32㎝の壷で約7時間、高さ23㎝・口径27㎝の高杯で約10時間、高さ27㎝・口径23㎝の叩きの甕で約4時間程度であった。しかしいずれも途中の乾燥時間を含むから、実際に手を動かしている時間は半分以下になる。とくに叩きの甕では、1時間程度である。

さて、焼成した土器の観察はⅢに記した。野焼き焼成・覆い焼き焼成によって土器の焼きあがりが異なっていることは既述したとおりだが、弥生式土器が両者のうちいずれに近い方法で焼成されたか、という問題がある。今回焼成した土器と比べてみると、硬軟・色調から、野焼き焼成と覆い焼き焼成の中間あたりに、弥生式土器をおけそうである。つまり、今回の野焼き焼成の土器は縄文色土器に近く、覆い焼き焼成の土器はむしろ土師器に近い焼きあがりであったといえる。

土器の焼成の良否は、結局粘土鉱物の結晶に熱変化がおきるだけの高温が得られるかどうか、得られた場合には、それがどの程度の時間維持できるかということにかかっている。今回の場合前者については問題ないのであるから（両者とも最高温度は800℃以上）、焼きあがりの差は、高温の維持という点にしぼられる。熱変化がおこるとされる600℃以上の維持時間は、野焼きで40分、覆い焼きで3～8時間であった。燃料の燃焼度という点からみれば、野焼きでは周囲から燃えたためと土器の上に木の枝などを厚く積みかさねたため空気が充分に供給されず、中央部は炭化しただけにとどまった。これに対し覆い焼きでは、煙突効果もあって中央部まで空気が吹きこまれ、燃料はほぼ完全に灰となった。また保温という点では、野焼きの場合燃焼がある程度すすむと土器が露出し、下半は赤く輝いていても上半は温度が下がってしまう。覆い焼きでは、内部は土器までも一様に赤～黄橙色に輝いているのが観察された。このことは、極く薄い被覆でも、燃焼・保温のうえで非常に有効なことを示している。しかし他方では、覆い焼き焼成の土器は弥生式土器とするにはいささか焼きが良すぎるのであって、とくに強風下ではあたかも陶器の如き焼きあがりとなってしまう。燃料を少なくすれば燃焼時間も短縮されることになるが、これまで各地で検出されている焼土壙に、スサを混えたような焼土（粘土）の検出例が皆無であることも考えあわせると、弥生式土器の焼成には覆い焼きのような窯的な方法は用いなかったと考える方が自然である。

今回の野焼き焼成の結果は満足すべきものではなかったが、高温をより長く維持できれば、好結果が期待される。そこで、燃料の配置等を考慮し、追試をおこなった。以下にその概略を記す。

ベースは、3方を丸太で囲い、なかに薪・割木を20～30㎝程度の厚さでならべた。この上に予熱の済んだ土器をならべ、上におく木の枝・割木は土器を覆う程度にとどめ、点火は丸太の隙間から3方同時におこなった。燃焼がすすんで土器が露出した部分には、カヤ等をおいて燃焼・保温をはかった。この結果、燃焼効率はかなり向上し、点火後約12時間で周囲の丸太を残して薪・割木は灰となり、ほぼ鎮火した。

焼成結果は良好で、色調・焼きともさきの野焼き・覆い焼き焼成の中間程度のものとなった。すなわち色調は淡褐色から黄褐色を基調とし、淡褐色斑あるいは黒斑を有する。黒斑の周囲は淡褐色ないし灰褐色斑となっている。焼きはややあまいが、全体として弥生式土器に通じる軟かさである。とくに丸太の隙間付近では良好な結果を得た。しかしこの追試においても、中央部は比較的燃焼がすすまず、中央部の土器を点火後2時間たらずの段階で周辺へ寄せる必要があった。本来最も高温になるべき中央部への、燃焼初期における空気供給についてなお改善の余地があるということになる。

なおこの追試では覆い焼きも併行しておこない、粘土等の違いによる発色などについて知見を得た。高槻市内では、大蔵司遺跡の青灰色粘土は濃赤褐色、

郡家本町付近の灰褐色粘土は赤褐色、郡家川西付近の灰褐色粘土は赤褐色～黄褐色、東大阪市山鹿遺跡の暗青灰粘土は赤褐色、東大阪市立博物館付近の茶褐色粘土は茶褐色、池上遺跡の黄褐色粘土は淡茶褐色系に、それぞれ発色した。また土器の温度が300℃程度のときに水をかけると、いちじるしく赤変することがわかった。なお、温度500℃程度の段階で青い松葉中に投入した土器は、瓦器と同様の暗青色を呈した。ヘラ磨きの部分は光沢を有し、内面は灰白色である。参考までに記しておく。これらの土器には、粘土に砂を混ぜないで製作したものがかなりある。その場合でも、成形にはとくに不都合はなかったが、採取したままでいったん乾燥させずにそのまま小石等を取り除いて使用したものはねばりに欠け、成形に時間がかかった。

さて、追試の結果、野焼き焼成で得た土器は弥生式土器に近似したものであった。このことについては、土中にある素焼きの土器の長年月にわたる経年変化を測定する手段がないために単純な比較はできないけれども、非常に保存状態のよい土器のなかには、復元土器と極めて近似する焼き・色調を有するものもある（例、瓜生堂遺跡出土の完形の手焙形土器）ことから、今回の追試において、燃焼温度・時間等焼成の基本的条件は満たしていると思われる。しかしなお燃焼効率に問題があり、多量の燃料を必要とするうえ、焼きあがりが一定でない。これら燃焼中の空気の供給、土器の周囲からの均等な加熱ないし保温を効果的におこなう方法としては、薪・丸太を井桁に組んだなかで土器を焼成することが考えられる。

現在なお、おこなわれている窯を用いない土器焼成にはさまざまな形態がある。東南アジアについてみれば、タイのチェンマイ周辺では薪の上に土器をおき、ワラでおおって灰をかけてから焼成する。マレーシアのペラ州クアラカンサー、インドネシアのサワラク州クチン周辺では薪の上に土器をおき、薪・木の枝を土器にたてかけるようにおおって焼成する例がある。インド・ネパールにおいても、こうした焼成法がおこなわれているという。これらの例は、土器を周囲から加熱する点では共通しているけれども、灰やワラ、粘土等の保温材を用いる覆い焼きに類するものと、そうでないものとに大まかに分けられる。前者は、使い捨ての窯ともみることができ、野焼きと窯との中間的な形態であるとすれば、後者のなかにさきの要件を満たすものがないか、ということになる。

そこで参考になると思われるのは、中華民国ラン島におけるヤミ族の土器焼成法である。ヤミ族は、報告によれば、2本の丸太を、間隔をおいて平行にならべ、上に直交して多数の薪をならべる。その上に「薪を交互に2本ずつ、土器をいれる空間をのこして、井桁に組む。薪は3～4段ずつ積みあげられ、その高さは約60㎝になる。」土器の上は太めの薪でおおい木枝を積みかさねて、井桁の周囲には薪をたてかけ、最後に、上部にカヤ・木枝をのせて、これらに点火する。点火後、若干の薪を足したりするが、約50分ほどで土器をはさみだして放置し、叩いて音でできき具合を調べ、水漏れがないか確かめてできあがりである。

この例では、ベースをすのこ様とした井桁のなかに土器をおくことで、周囲からの加熱および空気の供給を確保している。しかも上方に点火することで、間に薪があるために点火後ただちには炎が直接土器にあたることはない。燃焼初期における土器およびその付近の温度上昇は、比較的やわらげられることになる。カヤ等の灰の保温効果もみのがせない。これは、予熱を必要とせずに、しかも効率よく焼成をおこなえる点ですぐれた方法である。

このヤミ族の例をただちに弥生式土器に結びつけることはできないとしても、弥生式土器の焼成がこれに似た方法でおこなわれた可能性は高いと考えられる。

すなわちまず地面を掘りくぼめ、あるいは斜面を削って平坦として、ここに2本の丸太をわたす。この上に薪を直交させて密にならべ、ベースとする。そして中央に土器をいれる空間をのこして、薪を2

本ずつ交互において井桁を組む。高さは焼く土器の数に応じて、土器より高くなるようにする。このなかに土器をいれる（必ずしも正立している必要はなく、積みあげたり大きい土器のなかに小さい土器をいれることもあっただろう）。土器をいれおわったら、薪をならべて土器をおおい、木の枝などを積みかさねる。そして薪で組んだ井桁にたてかけるように薪を周囲におき、上部にこれらをおおうようにカヤをおいて、これに点火する。

このとき、燃焼とともに薪や土器は土壙内に落ちこみ、熾となって燃えつづける。しかし、焼成には600℃以上の高温が1時間程度維持されればよいと考えられるから、必ずしも燃料が灰になって鎮火するまで待つ必要はないともいえる。つまり焼成に必要な時間が経過したと判断した時点で、土器をとりだして冷却を待ち、一方薪等の熾は土をかけて消してしまうことも十分ありうる。この場合には、土壙中にかなりの量の消し炭ができることになる。燃料が完全に灰になった場合には黒斑ができないことや、燃料の有効利用、木炭の有用性・多用途性などを考慮すれば、こうした方法がとられた可能性は高い。

いずれにしても、こうした土器製作・焼成は生活カレンダーのなかに組みこまれたかたちでおこなわれていたことであろう。水稲採培の季節的周期性がどの程度生活を規制していたか知るよしもないけれども、少なくとも4月〜10月の間は農業労働が加わるうえ、天候も不安定であり、狩猟や林間の作業には適さない。反面また木材は9月〜3月頃に伐採したものが使用上すぐれているということは、木器の材や住居の建築材の伐採等が主に秋・冬におこなわれたと推定することを妨げない。同時に燃料の伐採・採集がおこなわれたとすることは、木の枝・カヤ等は枯れていた方が有利であることと符合する。一方、土器自体に籾圧痕や底面の木葉痕がみとめられることは、両者の併存する時期に土器製作がおこなわれていることを示すと考えられる。これらを勘案すれば、土器製作はすでに採取してある粘土を用いて秋におこなわれ、焼成は晩秋から初冬におこなったとみるのが妥当であると思われる。

以上、昭和54年2月と昭和55年10月におこなった実験をもとに、弥生式土器の製作・焼成における若干の問題を検討してきた。ここで得た見通しはしかし、技術論的な側面であって、生産・消費の問題については今後の課題である。

〔参考文献〕

土器製作について論述した文献は厖大な数にのぼり、論点も数多い。ここではとくに叩き技法と土器焼成に関して直接関連したものをあげるにとどめた。

都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』 20巻4号 1974年

関西大学考古学研究室『大師山』 河内長野市教育委員会 1977年

『安満遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1977年

傣族制陶工芸艺联合考察小組「記云南景洪傣族慢制陶工芸」『考古』 1977年4期

宇野文男「バシー文化圏における土器づくり」『季刊人類学』 5－1 1974年

5　弥生時代住居の復元

高槻市立埋蔵文化財調査センターでは、開館5周年記念事業として『郷土を知る文化財展』を、昭和55年10月17日から10月26日までの10日間開催した。今回は、高槻市内の遺跡から出土した遺物・遺構を主として、旧石器時代から江戸時代に至る歴史を一目でわかるよう展示する一方、古代の人々がどのような家を住居としてきたかを理解するために、実物大の竪穴住居を復元した。

竪穴住居は、現在、全国で約150棟程度復元されているが、復元にあたってのすべての共通点は、壁の高さと屋根に使用された材料について、考古学からの適切な物証が得られていないことである。今回、こうした状況の中で復元住居のモデルに選ばれたのは芝谷遺跡の12号竪穴住居址である。時期は弥生時代中期末のものである。この住居址が多数の遺構の中から選ばれた最大の理由は、火災を受けて火の廻りが速かったらしく、住居内で使用されていた用具が持ち出されずに、当時のまま残されていたからである。しかも、床面には建築材が多数炭化した状態で残り、板壁材の高さ等についても推定できたからである。出土した遺物は、土器48点、鉄器2点、石器1点である。

この12号竪穴住居址は、平面形が一辺約5 mの円形に近い隅丸方形を呈し、周壁の高さは約0.3 mを測る。床面の柱穴は5ケ所に認められた。特に中央の柱穴は他の柱穴と比べて大きく、しかも深く掘られていた。周溝はわずかな範囲しか検出されなかったが、その他の地点では小さな浅い柱穴が約1 m間隔で検出されており、板壁および垂木を支えるような構造になっていたことが推測された。また、一方の外辺部には、垂木の端を固定したと考えられる柱穴が検出されている。

復元に使用した資材は柱・垂木材として長さ4 mの皮付杉丸太50本、屋根の下地材として長さ4 mの竹100本、屋根材としてカヤ200束（約1 t）、板壁材として長さ1.6 mの杉板120枚、その他荒縄・麻紐などである。これらの資材の収集から住居の完成まで、8人の男性で10日間を費した。しかし、集めた材料はすぐに使用できるものばかりであって、本来、木を伐採したり、カヤを刈る人数や運搬に用いた人数などは加算されていない。

竪穴住居の復元作業は、発掘で明らかになった考古学事実にできるだけ忠実におこなった。第1段階は、平面形を地面上に描き、0.3 m掘り下げて床面とし、排土（約8 m³）は雨水流入防止用の堤として、周囲に平均して積み上げた。なお、入口想定部分は除く。第2段階としては、床面に屋根を支える4本の柱を建てる。約1.5 mの高さに丸太で4本の柱を固定し、足場とする。そして、床面から高さ約3 mのところで丸太を井桁に組む。その後、屋根組を作るため周囲から横木に垂木を放射状にかけ渡す。垂木の下端は、雨水の関係から堤より外側に少し出しておき、周囲に配した横木に垂木を固定する。中央の心柱は、入母屋の横木を支えるためまっすぐで長い材を使う。横木は、この心柱と、井桁の4隅からの斜材によって、縄でしっかり固定する。第3段階としては、カヤを葺く準備として、垂木に青竹を適当な間隔で固定する。この竹はよく乾かしたものを用いる。細いものはそのままで、太いものは半截して使用する。屋根の四隅はそのまま用いずに半截したものを曲げ垂木に固定する。第4段階としては、束ねたカヤを屋根下端より上方に葺き上げる。カヤは約20 cm程度の厚みをもたし、3分の2以上が被さるようにする。カヤの固定は切り込みを入れた竹で挟み込みながら、下地の竹に固定する。その際、さし手と受け手の2人で作業を進める。これは、ワラ葺きの昔の屋根作りと同じ方法でおこなった。特に棟屋根については、太いカヤ束で芯を作り、それを被うようにカヤを葺く。その後、カヤの端を整えてできあがる。最終段階としては、住居内の板壁を設ける。周壁に沿って溝を掘り、板を落し込んで垂直に立てて、ところどころに杭を打ち込んで竹を両側からあてて紐で固定する。杭は屋根の下地に固定す

る。このようにして復元を完了した。

今回の復元で問題を残したのは入口である。入口の構造が不明なため、推測による復元をとった。一方、入口周壁は復元時の出入で周壁の役目を果さなくなった。これは板で補強するなり、板戸の受けがあったりすることを考えねばならないであろう。

住居内の利用については、遺構・遺物から推測されるように炉および心柱を中心に四分割使用が適当である。一方、4本柱の上部に板や紐などで物を置くなり、吊るなりすれば平面の空間利用度は高くなるものと考えられる。また、壁際の空間は、これまで考えられた以上に人が立って歩ける空間の存在が明らかとなった。板壁については、芝谷遺跡での検出例からもうかがえるように周囲をめぐっていたことがわかったが、これは、住居内の保温などに役立つほか、板壁を工夫すれば板壁と屋根との空間をも利用できる状況であった。一方、調査に際して、普遍的にみられる住居の拡張は比較的容易にできうる可能性を秘めていると考えられる。また、住居建設の材料の入手は、すべて秋以降の時期と考えられる。建設時期の推定は1年サイクルの時間的経過が必要と推測される。

以上のようなことが明らかとなったが、考古学的所見から上部構造の推定・復元するについて、全体的には十分可能であるが、個々の詳細についてはいまだ解決されない点が多く、調査時の丁寧な作業と観察が必要であろう。

Ⅱ 埋蔵文化財の調査

1. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 876
調査面積　859 ㎡
調査期間　53年2月17日～4月10日
調査経過

史跡「嶋上郡衙跡」の北方、式内社阿久刀神社のすぐ西隣にあたる。この周辺では、これまでに大阪府・高槻市教育委員会が数度にわたって調査を実施しており、弥生時代から平安時代にかけての遺構を検出している。

今回、分譲住宅の建設が計画されたため、関係者と協議の結果、発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

耕土（0.15 m）、床土（0.3 m）、暗褐色土層（0.6 m）、黄灰色土層（地山）と堆積し、地山は挙大の礫を含む。検出された遺構は弥生時代の方形周溝墓 1基、古墳時代の竪穴式住居址 6棟、奈良時代の建物跡・溝等がある。

弥生時代の方形周溝墓は一部を検出しただけで、周溝は幅 1 m、深さ約 0.3 mを測る。規模は不明であるが、台状部には長さ 2.2 m・幅 1 mの土拡を検出した。周辺から出土している周溝墓との関連から弥生時代中期のものであろう。

古墳時代の竪穴式住居址は調査地区の北東部から南側中央部にかけて 1～2 mの間隔をもって検出され重複関係はない。いずれも方形プランを呈し、規模は大体一辺 4 m程であるが、1号住居址のみ一辺 1.6 mである。中央部には炉らしい掘り込みと周壁下に貯蔵穴状の落ち込みがみられる。また、2号住居址は 4回の拡張が認められる。

奈良時代の遺構は多数の柱穴が検出されたが、確認できる建物は 4間×4間の倉 1棟のみである。掘り方の一辺が 0.8 mを測る方形の柱穴で根石がみられた。

遺物には後期の縄文式土器をはじめ奈良・平安時代の須恵器・土師器までが出土した。

各住居址からは庄内併行期から布留式土器までが出土している。また、金環も 1個、暗褐色土層から出土している。

所　見

阿久刀神社周辺では、これまでにも弥生時代後期から古墳時代の竪穴式住居址が多数検出されているが、今回の調査でさらにその数を増やしている。この地区の背後には弁天山古墳群がひかえており、古墳と村落の関係を考えるうえで貴重である。(橋本)

2. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市川西町 1丁目 22
面　　積　2,591.48 ㎡
調査期間　53年4月3日
調査経過

史跡「嶋上郡衙跡」の南方約600 mの地点であり、レストランの建設が計画されたので関係者と協議の結果、発掘調査を実施した。

遺構・遺物

調査は 10 m×2 mのトレンチを設定して行なったが、層序は盛土（1 m）、旧耕土（0.2 m）、黄灰色粘土層（地上）で遺構・遺物は検出されなかった。

所　見

嶋上郡衙関係の遺構の南限を知ることができた。（橋本）

3. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市川西町 1丁目 771－2・3
面　　積　330.63 ㎡
調査期間　53年4月24日～25日
調査経過

史跡「嶋上郡衙跡」の東側に隣接したところで、分譲住宅の建設が計画されたため、関係者と協議の結果、発掘調査を実施した。

遺構・遺物

層序は盛土（1 m）、旧耕土（0.2 m）、床土（0.05 m）、暗褐色土層（0.4 m）、黄褐色含礫土層（地

山）と堆積する。調査区の南側を旧西国街道が通っているため山陽道の一部が検出されるかと考えられたが、その形跡はまったく認められなかった。遺構としては不定形土壙を2基検出したが墓かどうか不明である。

所　見

郡衙関係の遺構がこの付近までは拡がっていないことがわかった。（大船）

4. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町915－8番地

調査面積　128㎡

調査期間　昭和53年5月16日～5月31日

調査経過

当該地は、史跡「嶋上郡衙跡」の東側に隣接している。周辺地域のこれまでの調査では弥生時代中期の方形周溝墓などが検出されている。今回個人住宅の改築に先立って、発掘調査を実施した。

遺構・遺物

層序は盛土（0.4 m）、旧耕土（0.1 m）、床土（0.1 m）、黄褐色土層〔整地層〕（0.1 m）、黒褐色土層〔遺物包含層〕（0.25 m）、暗褐色含礫土層（地山）となる。

遺構としては、土壙1基、若干のピットおよび溝状遺構がある。土壙は長軸をほぼ東西におき、長径1.5 m、幅0.8 m、深さ0.3 mを測る。

遺物は、いくつかのピットから弥生式土器の細片が出土している。

所　見

溝状遺構は当初住居址の周溝とも考えられたが、周辺を精査した結果、住居址とは認められなかった。調査区が狭少であったためか、それ以上の知見は得られなかった。（森田）

5. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町915－9番地

調査面積　208㎡

調査期間　昭和53年5月16日～5月31日

調査経過

当該地は、史跡「嶋上郡衙跡」の東側に隣接している。周辺地域のこれまでの調査では弥生時代中期の方形周溝墓などが検出されている。今回個人住宅改築に先立って発掘調査を実施した。

遺　構

層序は、盛土（0.6 m）、旧耕土（0.15 m）、床土（0.1 m）、黄褐色粘質土層〔整地層〕（0.15 m）、黒褐色土層〔遺物包含層〕（0.25 m）、暗茶褐色含礫土層〔地山〕となる。

遺構としては、弥生時代後期の住居址1基と、時期不明の土壙墓1基、及び若干のピット等がある。住居址は1部を検出しただけであるが、1辺7.2 m前後を測る、やや規模の大きい方形住居址である。土壙墓は長軸をほぼ東西方向にとり、長さ1.8 m、幅0.95 m、深さ0.5 mを側る。

遺　物

遺物は土器のみで、住居址内の土壙及び住居址の埋土から出土している。器種は、壷・台付壷・坏・高坏・小形高坏・鉢などで、すべて弥生時代後期のものである。

所　見

周辺のこれまでの調査の結果、当該調査区一帯は弥生時代中期の墓域と考えられてきたが、今回、弥生時代後期の住居址を検出したことによって、新たな集落が現出する可能性がでてきた。（森田）

6. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町314－3

調査面積　86.27㎡

調査期間　53年5月18日

調査経過

史跡「嶋上郡衙」の北側に接し、現状は宅地である。個人の店舗付住宅が建設されることになったので関係者と協議の結果、発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

調査は東西 1.5 m・南北 5 mのトレンチを設定して実施した。層序は盛土（1 m）、旧耕土（0.2 m）、床土（0.05 m）、暗褐色土層（0.2 m）、黄灰色含礫土層（地山）である。暗褐色土層から土師器片が若干出土したのみで、遺構は検出されなかった。

所　見

調査範囲が狭小であるため周辺の遺構との関連を追求できなかった。（橋本）

7. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町 361

調査面積　44 m²

調査期間　昭和 53年 5月 18日～5月 31日

調査経過

史跡・嶋上郡衙跡の西南方約 150 mに位置する。個人住宅の改築が予定されたため、発掘調査を実施した。調査は東西 7 m、南北10 mのトレンチを設定して、土層の観察・遺構の有無を確認すべく実施した。

遺構・遺物

層序は、盛土（0.1 m）、旧耕土（0.2 m）、灰褐色粘土層（0.04 m）、黄灰色粘土層〔地山〕となる。調査区の大部分の地山は、後世、郡家新町に存在した瓦屋の原材料として採集されているところから、遺構・遺物は検出できなかった。

所　見

当調査区の東側でみられた硬くしまった砂層が検出されると思われたが、全くみられなかった。これは、旧石器時代の地山のあり方に原因があろう。（冨成）

8. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町 235 ～2 ・ 237 － 3

調査面積　720 m²

調査期間　昭和53年 6月 5日～6月 20日

調査経過

当該地は市道辻子－下ノ口線と西国街道が交差する地点から南約70 mのところである。今回、分譲住宅の建設が予定されたため、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

層序は耕土（0.2 m）で、包含層はなく、すぐその下は黄褐色粘土層〔地山〕になる。地山面の高さは、西側で標高 14.5 m・東側で 14.2 mを測る。

検出した遺構は、弥生時代後期の方形周溝墓 6基、土壙2、古墳時代後期の円墳 1基と甕棺 1基である。

弥生時代の方形周溝墓群は、1辺 3～4 mの小さなもので、すべて溝を共有しており、溝は幅約 0.5～1 m・深さ約 0.2～0.3 mを測る。検出した方形周溝墓は、削平されているためか主体部らしき痕跡はまったく認められなかった。

土壙は、3号方形周溝墓の北側で検出され、規模は長径 1～1.2 m・短形 0.8 m・深さ 0.15～0.2 mを測る。

古墳時代の遺構としては、径15 mの円墳を調査区中央で検出したが、北半分は調査区域にあり、全貌については不明である。周濠は幅 1～2.5 m・深さ 0.1～0.3 mを測る。甕棺は円墳の西濠肩に位置し、掘り方は径 0.6 m・深さ 0.2 mを測る。

遺　物

方形周溝墓の周溝内からは、弥生時代後期後半の風化の著しい壷・高杯・甕片が出土しているが、完形品に復元できるものはない。

古墳の周濠内からは、埴輪・須恵器片が少数出土したが、いずれも細片のものばかりであって、完形に復元できたものはない。埴輪を器形別にみると、円筒埴輪よりも盾などの形象埴輪の方が多い。須恵器は蓋坏・高坏・平瓶・壷・甕などがあり、時期は6世紀後半に比定される。

所　見

今回の調査地は、西国街道南側一帯に分布する川西古墳群の中央部に位置する。調査範囲は狭小であるが、当古墳群で最初の円墳（前方後円墳？）を検出したものをはじめ、弥生時代後期の新たな方形周溝墓群をも検出することができた。（大船）

9. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町360番地

調査面積　1,137㎡

調査期間　昭和53年7月8日～10月17日

調査経過

当該地は昨年度のトレンチ調査によって、旧石器資料を検出したところである。今年度は、旧石器出土地点を中心にして、全面調査をおこなった。

遺構・遺物

今回新たに検出した遺物は、サヌカイト製の舟底形石器1点・掻器1点・剥片430点余り、および礫群である。そのうち石器類は、昨年度に調査したものを合わせると、舟底形石器5点（完形品2点）・掻器2点・剥片1,000点余りとなる。ところで、昭和52年・53年の調査結果では、国府型ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核など、国府文化期を示唆すべき資料がまったく出土しておらず注目される。

さて、これらの遺物の出土状況をみると、剥片を中心とするまとまりと礫を中心とする2ケ所のまとまり、および径1～5mの小さな礫が散在するところとに大別できる。前記の3つのブロックには舟底形石器や掻器が、それぞれかかわりあいをもって出土している。また、遺構のすぐ西側に、遺構と同時期にあったと考えられる深さ0.3～0.4m、幅6～7mの旧河床を検出した。この旧河床は南南東の方向性をもって流れており、遺跡の西端を限るものであろう。

所　見

今回検出した遺物は、調査区の北東部の東西11m、南北11mの範囲の中からすべて出土しており、その他の大部分のところからは検出されず、調査範囲全体からみれば、遺物の出土状況は偏っている。遺跡の拡がりについては、調査区域外の北側および東側に続くものと考えられ、今回検出した遺構は、遺跡の南西部の一画と推定できる。（森田）

10. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町350－4番地

調査面積　170㎡

調査期間　昭和53年11月14日～11月20日

調査経過

史跡「嶋上郡衙跡」の西南方約300mのところである。本調査区南東部の調査の折、旧石器時代の資料が多く検出されたことから、その拡がりを確認すべく調査をおこなった。

遺構・遺物

層序は盛土（0.4m）、旧耕土（0.1m）、床土（0.3m）、灰褐色砂質粘土層（0.6m）、灰褐色硬質砂層（0.1m）、以下褐色粘土層となる。しかし、遺構・遺物は検出されなかった。

所　見

旧石器時代の包含層である灰褐色粘土層を覆っている灰褐色硬質砂層を検出したが、灰褐色粘土層は認められず、旧石器時代の遺構の拡がりは、当調査区まで及んでいないと考えられる。（森田）

11. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市今城町22－4

調査面積　1,978㎡

調査期間　昭和54年1月5日～1月7日

調査経過

当該地は本遺跡の南限である国道171号線に面し、東側は市道下ノ口－辻子線が水路を隔てて走っている。今回、自動車工場内において、事務所の改築工事が予定されたため、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は建物予定地内に以前の基礎があることから3m角のトレンチを3ケ所設けておこなった。層序は盛土（0.6m）・耕土（0.2m）・床土（0.1m）で、その下はすぐに黄灰色土層の地山になり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。

所　見

今回の調査範囲は狭少であったが、遺構・遺物はまったく検出することができず、東側の沼跡検出例と合せ、本遺跡の南限と考えられる。（大船）

12. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 781－3・790－2

調査面積　220㎡

調査期間　昭和54年2月5日～3月5日

調査経過

当該地は式内社阿久刀神社の東約80 mのところにに位置し、現状は水田である。今回、分譲住宅の建設が予定されたため、時前に発掘調査を実施した。

遺　構

層序は耕土（0.2 m）・床土（0.2 m）・暗茶褐色土層〔包含層〕（0.6 m）となり、地山は茶褐色土層であるが一部に礫層の拡がりが見られる。

検出した遺構は、弥生時代後期後半の竪穴式住居址3基と土壙3基および柱穴などである。住居址はいずれも調査範囲が限られたため、大部分は調査地区外にあって、規模等は不明である。住居址1・2では、2回の建て替えが認められ、中央部に炉跡と考えられる焼土がある。土壙は3基とも長軸を東西方向にして、ほぼ並行関係を保って、調査区の北側から検出された。土壙の埋土は窯褐色土で、出土遺物はまったく認められなかった。

遺　物

暗茶褐色土層〔包含層〕より弥生時代中期から奈良時代に至る各種・各時代の土器が出土した。これらの多くは細片ばかりで、完形に復元できたものは少ない。また、北調査区の地山面下からは、旧石器時代の国府文化期に属するサヌカイト製の石核・剥片が出土した。

所　見

嶋上郡衙の北側一帯は、弥生時代から中世まで連綿と続く住居地域である。今回の調査地は、住居地域と予測される北東辺にあたるが、多数の竪穴式住居の検出によって、集落地がさらに拡がるものと考えられる。（大船）

13. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 898－1・902

調査面積　1,600㎡

調査期間　昭和54年3月6日～6月1日

調査経過

当該地は史跡・嶋上郡衙跡の北側境界線に接し、北側は府道郡家－茨木線が東西に走る。現状は水田である。今回、分譲住宅の建設に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

層序は耕土（0.3 m）・床土（0.1 m）・灰色砂礫層〔整地層〕（0.2 m）・黄褐色土層（0.2～0.4 m）・暗褐色礫土層（0.2 m）・暗褐色礫土層（0.1～0.2 m）で、地山面は黄茶褐色土～礫層になる。地山面の標高は16.55～17.25 mを測り、東側にゆるやかな傾斜地となっている。

検出した遺構は、弥生時代後期後半から12世紀後半までの長期にわたる住居址・井戸・溝・柱穴・落ち込み・土壙・石敷などである。このような各時代の遺構が重複して密集する地域は、本遺跡でも北半分に限られている。

弥生時代後期後半から6世紀末にかけての主な遺構は、16基の竪穴住居址である。その他、溝・土器溜などがわずかにある。

奈良・平安時代の遺構は、掘立柱建物跡・井戸・溝などであり、調査区全域から検出される。掘立柱建物跡の分布は、大きく井戸1・2を中心とする北グループと、井戸3を中心とする南グループに分けることができる。またこれらの建物は、柱通りと重複関係によって最低6群に分類される。

鎌倉時代の遺構は、石組井戸・石敷・掘立柱建物跡と多数の柱穴である。建物跡はあまりにも規模が小さく、建物自体の規則制が顕著でないこともあって、明確に建物跡を決めることができなかった。

遺　物

出土した遺物は、各時代の遺構が密集することもあって、膨大で多種多様なものがある。しかし、それら多くの土器片は細片であって、完形に復元できたものは少ない。

この調査区で最も古い遺物は、柱穴から出土した大形蛤刃石斧であろう。その他、代表的な遺物を列

記すれば、井戸2出土の黒色土器・桃の種子・高野槇の井戸枠・石組井戸出土の軸受け石などがある。

所　見

史跡境界線の外側ではあるが、各時代の重要な遺構が多数重複して検出された。特にこの地区は弥生時代から連綿と続く住居地域であったらしく、嶋上郡衙がどのように成立・衰退していったか、知ることが出来る。（大船）

14. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町313－1

調査面積　717㎡

調査期間　昭和54年3月24日～3月26日

調査経過

当該地は市道辻子－下ノ口線と府道郡家－茨木線が交差する南西隅のガソリン給油所である。今回、給油所の上屋の建設が予定されたため、支柱の基礎になる部分について、発掘調査を実施した。

遺構・遺物

上屋の支柱は4ケ所であり、基礎の掘り方は1辺1.3mである。南側の支柱2ケ所は、以前の工事の際に撹乱を受けていたため、北側の支柱2ケ所についてのみ、調査をおこなった。層序は盛土（1.1m）・耕土（0.3m）・茶褐色土層（0.2m）〔包含層〕・黄褐色土層〕でる。今回の調査は、調査範囲が非常に限られたため、遺物・遺構の検出は認められなかった。

所　見

本調査区一帯は、弥生時代後期後半から奈良時代にかけての居住地域になっていたところである。今回は調査範囲が限られたため、遺構・遺物の検出が認められなかったが、茶褐色土層の厚い堆積は、付近に住居址等の存在を示唆するものであろう。（大船）

15. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町151－2番地

調査面積　524㎡

調査期間　昭和54年3月5日～9日

調査経過

当該地は史跡・嶋上郡衙跡の西南方約350mのところで、旧西国街道の南約40mに位置している。丁度郡家川西遺跡と郡家今城遺跡の中間にあたる。

遺構・遺物

調査は幅4m、長さ10mのトレンチを設定しておこなった。層序は盛土（0.3m）、灰褐色粘土層〔整地層〕（約0.3m）・灰褐色粘質土層〔整地層〕（約0.4m）・暗灰色ないし灰白色粘土層〔地山〕となる。遺物包含層はみられず、遺構も検出できなかった。整地層中から若干の須恵器片や土師器片が出土している。またわずかではあるが、炭や灰も検出している。

所　見

当該調査区の北方約130mの地点で、旧石器時代の遺構が検出されているが、今回の調査ではみられなかった。また他の時期に該当する遺構もなく、両遺跡の外辺部にあたると考えられる。（森田）

16. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町855－1・2－3番地外

調査面積　741㎡

調査期間　昭和54年9月17日～10月30日

調査経過

当該地は、史跡・嶋上郡衙跡の北東隅部に隣接しており、以前に南側の調査地から住居址郡が検出されるなど、遺構・遺物が良好に保存されているところである。今回個人住宅建設に先立って、発掘調査を実施した。

遺　構

主な層序は、表土層（0.1m）・黄褐色土層〔盛土〕（0.4m）・淡茶灰色土層（0.2m）・淡黄灰色土層（0.2m）・淡茶褐色土層（0.2～0.3m）〔以上整地層〕・茶灰色砂質土層（一部）〔中世包含層〕（0.2m）・灰褐色砂質土層（一部）〔整地層〕（0.02～0.1m）・黄灰褐色砂質土層〔古墳時代の包含層〕（0.2～0.3m）・灰褐色砂質土層

〔弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての包含層〕（0.1～0.2 m）・茶褐色土層〔弥生時代中期の包含層〕（0.1～0.3 m）・暗茶褐色土層〔無遺物・堆積土層〕（0.2～0.5 m）・黄褐色礫土層〔地山〕となる。遺構としては、弥生時代中期の円形土壙1基・土壙4基・落ち込み2ケ所・不定形溝状遺構、同じく後期の住居址1基・土壙3基・古墳時代前期の住居址1基、溝などがある。さらには、歴史時代の遺構として、石組み井戸3基がある。1基は鎌倉時代で、もう1基は江戸時代中頃以降、残りの1つは、近世末～近代にかけてのものである。遺構のうち、弥生時代中期の円形土壙は、住居址になる可能性がある。

遺　物

出土した遺物は多く、縄文時代～江戸時代にわたってのものが出土している。縄文時代では、船橋式土器1片を検出している。弥生時代では、中期の土器（壷・甕・鉢・高坏・水差し）と石器（磨製石鏃・石庖丁・扁平片刃石斧・剥片石器）及び紡錘車が検出されている。後期の遺物としては、甕・鉢・高坏などの土器類が主である。古墳時代の遺物としては、古式土師器、須恵器などがある。鎌倉時代では井戸から出土した、土師器・瓦器・陶磁片などの土器類をはじめ、人形・曲物などの木製品がある。江戸時代では、やはり井戸から出土した備前焼片・機瓦片・急須・竹製杓・墨書のある祭祀用の木柱などがある。木柱は現存長33 cm・太さ44 cmで、断面6角形を呈す。頂部は中心部をやや高くして、求心状に三角形の面を6単位つくっている。また、縦方向の各面も数ケ所に刃物で区切りをつけて単位面をつくっている。墨書はこれらの単位面に1～2字を記している。頂部には右回りに「標」・「空」・「風」・「火」・「水」・「地」と記している。縦の各面には、上から「姜」・「太」・「公」・「在比」と記し、それ以下は腐蝕のため一部を除いて、殆んど判続できない。例えば、頂部の「火」の面に対応する縦の面で「従口」、「水」の面に対応する縦の面で「口無」と読めるくらいである。

所　見

弥生時代中期に属する遺構・遺物が顕著に認められ、郡家川西遺跡における居住地域を推定できるようになった意義は大きい。また清福寺町に拡がる中世遺構の南限を示す包含層も検出できた。（森田）

17. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町898－3番地

調査面積　165 m²

調査期間　昭和54年4月19日～5月25日

調査経過

当該地は、史跡・嶋上郡衙跡の北側約20 mに位置し、これまでの周辺地区の調査によって、遺構が濃密に分布する地域として知られている。

遺　構

検出した遺構は、弥生時代の住居址2基、落ち込み1ケ所、古墳時代の住居址1基、溝2本などである。住居址1は、1部が調査区域外にあるものの1辺約5 mの方形住居址に復元出来る。時期は弥生時代後期であろう。もう1基の住居址は1部を調査したにすぎないが、側溝からやはり後期の土器片を検出している。落ち込みは5 m×5 mの扇形になり、中央部に炭と焼け土の拡がりを認めた。古墳時代の住居址は1辺約7.4 mを測る方形のものである。南辺部中央で、2つの方形ピットを検出している。溝はいずれも掘り方のしっかりしたもので、6世紀後半に比定できるものである。

遺　物

遺物としては、弥生土器、須恵器、土師器などの土器類が主で、完形に復せるものはない。いずれも現位置をとどめておらず、2次堆積のものである。

所　見

予想されたように、多くの遺構を検出したが、良好な包含層の割に、まとまった遺物は出土しなかった。それは各時期にわたり削平や整地がくり返されたことによるのであろう。（森田）

18. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 316－1

調査面積　250 ㎡

調査期間　昭和54年5月15日～6月5日

調査経過

当調査地区は式内社阿久刀神社の西に位置し、周辺部のこれまでの調査では弥生時代から平安時代にかけての遺構・遺物が検出されている。今回、個人住宅が建設されることになり、これに先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

約0.5 mの盛土を除去すると、旧耕土（0.1 m）、床土（0.05 m）、褐色土（0.3 m）と堆積し、地山は礫を多く含む黄褐色土である。

調査区の東側に深さ0.4 mの南北方向の溝を検出した。幅は不明である。内部から備前焼擂鉢・中国製磁器等が検出された。

所　見

検出された溝は、現在すぐ東側に存る水路の前身とみられる。遺物類は室町時代のもので、郡衙北方に営まれた中世集落の一端とみられる。（橋本）

19. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町 228・234

調査面積　3,014 ㎡

調査期間　昭和54年7月3日～8月8日

調査経過

当該地は西国街道（旧山陽道）と市道辻子－下ノ口線の交差点より南約80 m下った西側に位置する。現状は水田である。今回、資材置場の建設が予定されたため、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

層序は、削平されているために床土・包含層は存在せず、耕土下はすぐ黄褐色土層〔地山〕になる。

検出した遺構は、調査区全域にわたって認められ、大別して弥生時代後期後半のものと古墳時代前・後期のものがある。

(1)　弥生時代の遺構

・方形周溝墓　調査区の中央部北側に位置する。規模は南北辺6.3 m、東西辺5 mを測り、南北に少し長い。周溝は幅0.5～1 m・深さ0.2～0.25 mを測り、一巡していたと考えられる。

・溝1　調査区を南西隅に向けて縦走する幅0.5～0.7 m・深さ0.25 mの長いU字溝である。

・溝2　溝1.の西側を並行して走る幅0.2 m・深さ0.05 mの溝で、溝底が部分的に遺存している。

・溝3　調査区の南東部に位置する。規模は幅1.8 m・深さ0.3 mを測り、南東方向に向ってゆるやかに傾斜している。

(2)　古墳時代の遺構

・円墳　調査区の中央北寄に位置する。墳丘の規模は径8.4 mとほぼ円形であり、周濠は幅1～2 m・深さ0.3～0.45 mを測り、北側には3ケ所の突出した浅い掘り込みがある。

・方墳1　調査区の北東隅で検出したが、大部分は調査区域外にあり、規模等については不明である。周濠の幅は約6 m・深さ0.5 mを測る。

・方墳2　調査区の中央部にあって、南側半分が一段低く削られているところから、全貌については不明である。墳丘の規模は、東西辺7 m・南北辺8.4 mを測り、少し南北に長い。周濠の幅は1.9～2.8 m・深さ0.2 mを測る。

・方墳3　方墳2の南側に位置し、北濠は方墳2の南濠を新しく切って掘られている。墳丘の規模は、東西辺5.6 m・南北辺6.4 mを測り、少し南北に長い。周濠の規模は、幅1.5 m～2.8 m・深さ0.1 m～0.15 mを測る。

・方墳4　方墳3の南側に位置し、西側の一部は調査区域外にあり、全貌については不明である。墳丘の規模は、東西辺9.1 m・南北辺10.7 mを測り、少し南北に長い。周濠の規模は、幅2 m～4.2 m・深さ0.1 mを測る。

・前方後方墳1　調査区の中央部にあって、後方部の大部分が調査区域外にある。墳丘の規模は、前方部幅6 m・前方部長さ7.5 m、クビレ部幅4 m・後方部幅13.5 mを測る。周濠の規模は、幅1.1 m～

5.7 m・深さ 0.2～0.6 mを測る。

・前方後方墳２　調査区の北西隅に位置し、後方部の一部は調査地区外にある。墳丘の規模は、前方部幅 6.5 m・前方部長さ 7.4 m・クビレ部幅 3.8 m・後方部幅１４mを測る。周濠の規模は、幅１～6.7 m・深さ 0.2 mを測る。

・土器棺　円墳の北西部に位置する。掘り方の規模は、径約 0.6 mのほぼ円形を呈し、深さ 0.4 mを測る。土器棺は鉢形土器の口縁部を上下に２個体合せ、掘り方の南側に寄せて据えられていた。

・自然流路　調査区の南側に位置し、西方から蛇行しながら東流する大きな水路である。流路は一定しておらず、幾度か方向を変えたためにその幅も 1.5 m～６mと一定していない。また、深さも 0.6 m～１mを測る。

遺　物

出土した遺物は、弥生時代後期後半の遺構に伴う遺物から、水田開墾時の整地にあたって混入したものまで長期にわたっている。その他、出土した遺物の特徴を列挙すれば、国府型ナイフ形石器・削器・剥片が中央部落ち込みから出土した。また、縄文時代の石鏃２点も付近から出土している。弥生時代後期後半の遺物は、ほぼ全域から出土したが細片ばかりである。古墳時代の遺物は少なく、埴輪は方墳１と前方後方墳２の２基からのみであり、その他の周濠内からの出土遺物はほとんどない。一方、奈良時代以降に属する須恵器・灰釉陶器・瓦・瓦器片は調査区の南側整地から出土した。

所　見

西国街道より南側一帯は、弥生時代から墓域になっていたらしく、住居等に伴う遺構は今回もまったく検出されていない。今回、調査した地区は、川西古墳群のなかでも中心部に位置し、調査区全域から７基の古墳跡を検出した。古墳跡はいずれも盛土が削平され、周濠のみしか遺存しないもので、埋葬施設等もほとんど不明である。特に今回検出した前方後方墳２基は、同規模で並存関係にあり、川西古墳群の構成を考えるうえで重要である。また方墳１から出土した墳輪は、昭和４６年に調査した７６－Ｍ～Ｐ地区の方墳と同一のものであることが判明した。（大船）

20. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 915－２

調査面積　112.39 ㎡

調査期間　昭和 54 年８月 22 日～８月 31 日

調査経過

当該地は史跡「嶋上郡衙跡」の東側中央部に位置し、現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、発掘調査を実施した。

遺　構

調査は、申請地（東西１２m、南北９m）の中央部に東西 6.5 m、南北 2.5 mのトレンチを設けておこなった。層序は盛土（0.3 m）・耕土（0.2 m）・床土（0.3 m）・暗茶褐色土層（0.1 m）〔包含層〕であり、地山面は茶褐色土層となる。地山面は標高１５mを測る。

遺構は、調査範囲が限られたため検出することができなかった。

遺　物

遺物は、包含層から時期不明の土師器片がわずかに数点出土したのみである。

所　見

調査地の東・南側一帯にかけては、弥生時代中期から後期の方形の方形周溝墓・土壙墓群が群在する墓域である。一方、本調査区の北側約４０mの地点では、弥生時代後期後半の住居址群が検出されている。調査地は墓域と集落のほぼ中間に位置し、遺構の少ない地域であったと考えられる。（大船）

21. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 781 ～３番地

調査面積　330 ㎡

調査期間　昭和 54 年 11 月 26 日～12 月 22 日

調査経過

当該地は史跡・嶋上郡衙跡の北東方向に位置し、

阿久刀神社の東約８０ｍのところである。またすぐ北側は、芥川の土堤と接している。これまでの周辺地域の調査では、弥生～中世に至る遺構を多数検出しており、当該地においても、その成果が大いに期待されるところである。

遺　構

層序は表土（０.２～０.３ｍ）・茶灰色土層〔整地層〕（０.１～０.２ｍ）・暗褐色土層〔遺物包含層〕（０.３～０.４ｍ）・茶褐色礫土層〔地山〕となり、地山面の高さは標高約１７ｍである。遺構としては、弥生時代の住居址２基と溝、古墳時代の住居祉２基、中世の方形土壙・井戸がある。弥生時代の住居祉はいずれも後期のもので、その大半は調査区域外にある。古墳時代の住居址は前期のもので、重なって検出された。おそらく建て替えられたものであろう。中世の方形土壙は１辺約４.５ｍの隅丸方形を呈し、深さ０.７ｍを測る。底部はフラットに近く、壁面の立ち上りは緩やかである。埋土中に多くの炭や焼土とともにスサを混えた窯壁状の破片が散乱していた。井戸は二段掘の掘り方を有する石組のもので、内径は上辺で0.75ｍ、底部で0.65ｍを測り、現存する深さは1.3ｍである。

遺　物

まとまって出土したものはなく、弥生時代から中世に至る土器片が遺構に伴って出土したぐらいである。他に方形土壙から鉄釘片を検出している。

所　見

今回の調査で、弥生時代後期後半から、古墳時代前期に至る集落が、芥川の真近にまで拡がっているのが確認された。また、包含層の状況からして、芥川の土堤築成以前に、芥川の侵蝕によって、遺跡地が削りとられている可能性がうかがえる。（森田）

22. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 806 － 1

調査面積　300 ㎡

調査期間　54年12月11日～55年1月17日

調査経過

清福寺の集落の北西端で、周辺部のこれまでの調査では弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。今回、自家用車庫建設が計画されたので、発掘調査を実施した。

遺構・遺物

約0.2ｍの耕土を除去すると、黄灰色土（0.3ｍ）、黄褐色土（０.３ｍ）、暗褐色（０.５ｍ）と堆積し、地山は砂礫混じりの淡褐色土である。各層とも砂礫が混入し、芥川の氾濫がくり返されたことが判る。黄褐色土上面に中世の小柱穴が若干認められるが、まとまりを欠いている。黄褐色土、暗褐色土には古墳時代から奈良・平安時代の遺物を包含している。地山の淡褐色土には挙大の礫が含まれ、調査区の南と北では特に顕著に認められた。遺構はこの礫を避けて調査区の中央部に土壙墓・溝・柱穴が検出された。

溝は幅０.６ｍ・深さ０.３ｍで南北方向に掘削されている。土壙墓は３基検出されたが古墳時代のものである。柱穴にはまとまりがみとめられなかった。

土師器・須恵器・緑釉陶器などが検出されている土師器には、布留式期以後のものであり、土師質で断面楕円形を呈する土管状の遺物が出土しているが用途は不明である。緑釉陶器には椀・皿があり、底部が蛇の目、平底、貼りつけ高台のものがある。

所　見

芥川近くにもかかわらず、古墳時代から平安時代まで集落が営まれていることが判ったが、特に平安時代以後は中心的な集落が形成されてくるようである。（橋本）

23. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家本町 325 － 1番地

調査面積　922 ㎡

調査期間　昭和55年4月3日～5月21日

調査経過

当該地は史跡・嶋上郡衙跡の西北約 120 ｍに位置し、府道郡家－茨木線の北側に面している。今回保

育所建設に先立って発掘調査を実施した。

遺　構

層序は、耕土・床土・茶灰色土層〔歴史時代包含層〕、茶褐色土層〔弥生～古墳時代包含層〕、黄褐色土層ないし灰褐色礫層（地山）となる。遺構としては、弥生時代後期の井戸２基、溝１条、古墳時代の土壙２０基、歴史時代の建物２棟・倉１棟がある。井戸はいずれも素掘りで、径1.5ｍ、深さ1.3ｍのものと、径1.5ｍ、深さ0.5ｍのものがある。溝は幅0.6ｍ、深さ0.55ｍを測り、N－40°－E の方向性をもっている。土壙は、円形、隅丸方形、長円形のものもあるが、長円形のものが最も多い。いくつかの土壙から６世紀後半の須恵器を検出しており、この時期が考えられる。建物跡については、2間（柱間1.3ｍ）×3間（柱間1.4ｍ）と2間（柱間2.2ｍ）×3間以上（柱間1.9ｍ—部2.7ｍ）のもので、倉跡については、２間（柱間1.6ｍ）×２間（柱間1.6ｍ）であり、いずれも７世紀代の遺構である。なお他にも、中世のものと考えられるピットが若干検出されている。

遺　物

弥生土器・須恵器・土師器など多数検出した。その他にも土壙から、鉄鏃１点、土錘１０点（内１点は包含層）、埴輪などがある。

所　見

当該地は、郡家川西遺跡の西北隅と考えられていたが、弥生時代～歴史時代に至る遺構の存在と良好な包含層のあり方は、単に遺跡の周辺部とは考えがたく、今後の周辺地区の調査が期待される。また当調査区の南７０ｍに芥川廃寺があり、その関連についても興味がもたれるところである。（森田）

24. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町915－６番地

調査面積　151㎡

調査期間　昭和55年５月12日～５月31日

調査経過

史跡・嶋上郡衙跡の東側に位置し、住宅建設に先立って、発掘調査を実施した。

遺　構

層序は、盛土、耕土、床土、黄灰色砂礫土層、暗茶褐色土層（遺物包含層）、黄褐色礫土層（地山）となる。検出した遺構は土壙３基と若干のピットである。土壙の１つについては、溝状遺構になる可能性がある。時期については、伴出遺物がほとんどないため明確でない。

遺　物

包含層から若干の弥生土器片（中期・後期）と石庖丁片が検出されている。

所　見

当該調査区周辺のこれまでの調査で、弥生時代中期の方形周溝墓や後期の住居址が検出されていることから、このころの時期の遺構とすることが出来よう。調査面積が狭いため遺構の性格を明らかにすることが出来なかった。（森田）

25. 嶋上郡衙跡

調 査 地　高槻市郡家新町142－１

調査面積　229㎡

調査期間　昭和55年５月17日～５月30日

調査経過

当該地は府立三島高校の東約２０ｍに位置し、現状は宅地である。今回、個人住宅の新築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は中央部に４ｍ角のトレンチを設け、残土・盛土の関係から重機を使用しておこなった。層序は盛土（0.8ｍ）・耕土（0.15）・床土（0.1ｍ）・青灰褐色土層（0.15ｍ）〔整地層〕・黄褐色粘土層〔地山〕である。

検出した遺構は、径２０～２５㎝、深さ５～１０㎝の小さな柱穴３個のみである。柱穴の埋土は淡茶褐色土層であり、遺物は認められなかった。

遺　物

遺物としては、整地層から出土した土師器細片が２点ある。

所　見

調査地は本遺跡と郡家今城遺跡のほぼ中間に位置し、遺構の分布が希薄なところである。今回の調査は範囲は狭少なため、検出した遺構の性格等は不明であるが、近くに住居遺構の存在が考えられる。（大船）

26. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町 159

調査面積　125 ㎡

調査期間　昭和 55年 7月 8日

調査経過

当該地は府立三島高校の東約300 mに位置し、東側は昭和 54年7 月の調査地（ 75 －D・H・L ・P 地区）に接する。現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は調査区中央部に 4 m角のトレンチを設けておこなった。層序は盛土（ 1.4 m ）・耕土（ 0.15 m ）・黄褐色土層〔地山〕である。

検出した遺構は、トレンチ中央部に幅 2 m ・深さ 0.2 mの東西溝のみである。溝中の埋土は暗茶褐色土層であり、遺物はまったく出土しなかった。

所　見

調査地は川西古墳群の南側にあたり、検出した溝は、東側の発掘調査成果などと考え合せて見ると、墳丘が削平された方墳の濠と考えられる。（大船）

27. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家本町 889

調査面積　419 ㎡

調査期間　昭和 55年 12月 8日～12 月 16日

調査経過

当該地は式内社阿久刀神社の西約 150 mに位置し、北側は芥川の土堤に接している。現状は宅地である。今回、個大住宅の新築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は庭木・建物基礎の関係から、調査地南側に東西 7 m、南北 1.5 mのトレンチを設けておこなった。層序は盛土（ 0.3 m ）・耕土（ 0.2 m ）・床土（ 0.1 m ）・茶褐色土層（ 0.4 m ）〔包含層〕・暗黄褐色土層〔地山〕である。

検出した遺構は、調査範囲が限られたため、3個の柱穴と 1ケ所の落ち込みだけであった。遺構の埋土は包含層と同じ茶褐色土層である。

遺　物

出土した遺物は、土器片と石器片が少量ある。柱穴・落ち込みの遺構から出土したものは、縄文式土器・弥生式土器片が若干とサヌカイト剥片が 1 1点ある。包含層から出土したものは、縄 文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器片が若干ある。

所　見

調査地は、本遺跡の北側の高台に位置する。調査範囲が狭少であったため詳細は不明であるが、縄文時代の遺構の存在が考えられる。この付近一帯は、以前から石鏃・石棒等が採集されたところであり、高槻市内では数少ない縄文時代遺跡の一つとして知られている。（大船）

28. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家本町 524番地の 6

調査面積　222 ㎡

調査期間　昭和 55年 11月 10日～11 月 20日

調査経過

当該地は、史跡指定地の西北約 400 mの位置にあたり、以前の調査で旧石器時代の資料を得ているところから調査を実施した。

遺構・遺物

調査は 2 m× 3 mのトレンチを設けておこなった。層序は盛土（ 1.3 m ）、耕土（ 0.15 m ）、床土（ 0.1 m ）、灰褐色粘土層〔地山〕（ 0.3 m ）、褐色礫層〔地山〕である。遺物包含層や遺構は認められなかった。また、旧石器時代資料の有無を確めるため、地山面を掘り下げたが果せなかった。

所　見

当該地は、郡家川西遺跡の外辺部にあたると考えられ、遺構・遺物の希薄な地域とすることができる。しかし、旧石器時代の調査については、今後も追求する必要があろう。

29. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市郡家新町 148 － 5

調査面積　702 ㎡

調査期間　昭和 56 年 1 月 8 日～1 月 24 日

調査経過

当該地は府立三島高校の東約 5 0 mに位置し、現状は水田である。今回、宅地造成が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は中央部に東西 2 m、南北 4 0 mのトレンチを設けておこなった。層序は耕土（ 0.2 m ）で、その下はすぐに黄褐色砂質粘土層〔地山〕となり、床土・包含層は認められなかった。地山面では遺構はまったく検出されず、瓦用の粘土採掘跡が数ケ所認められただけである。

所　見

調査地は本遺跡と郡家今城遺跡とのほぼ中間地にあり、両遺跡の遺構の拡がりがおよんでいないことが確認された。（大船）

30. 嶋上郡衙跡

所 在 地　高槻市清福寺町 889 － 2 番地

調査面積　446 ㎡

調査期間　昭和 56 年 2 月 10 日～3 月 14 日

調査経過

当該地は、史跡指定地の北約 300 mに位置し、阿久刀神社のすぐ南側にあたる。周囲のこれまでの調査では、弥生時代～中世までの遺構が重なり合って検出されており、遺構分布の濃密な地域の中心部にあたる。今回住宅建設に先立って、発掘調査を実施した。

遺　構

検出した遺構は、弥生時代中期の土壙 1 基、後期の住居址 1 基、奈良時代の掘立柱建物跡 1 棟などである。

土壙は、幅 0.45 m、深さ 0.2 mを測り、長さについては、他端が調査区域外にあるため不明である。方形周溝墓の周溝の可能性もある。住居址は、四柱穴構造をもつ方形プランの竪穴式住居で、東西 7.1 m、南北 8.2 mを測る。竪穴式住居としては大規模なものであろう。4 本柱はいずれも深さ 0.6 m ～ 0.7 mを測り、しっかりした上部構造が考えられる。掘立柱建物については、1 辺 0.6 m、深さ 0.2 5 m の方形ピットを 2 個検出した。方位は W － 14°－ E で、柱間は 2.5 mである。

遺　物

遺物は主に土壙と住居址から出土している。土壙からはほぼ完形に復元できた把手付壷と広口壷が検出された。住居址からは、後期の土器片若干と柱穴から鉈と思われる鉄器を 1 点検出している。その他に包含層から、土師器・須恵器・弥生式土器・瓦器の破片などが出土している。土器以外では、石剣片や金環などが検出された。

所　見

当該地は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居址が群在する地域の一画であるが、これほどの規模をもつものは極めて少なく、この時期の居住域の中心部分になるかもしれない。また、住居址の外壁に接して検出された多くのピットは、竪穴住居の壁構造を考えるとき 1 つの資料となる。（森田）

31. 郡家本町遺跡

所 在 地　高槻市郡家本町 1,000 － 3

調査面積　64 ㎡

調査経過

嶋上郡衙跡背後の台地上に位置し、周辺から弥生式土器等が出土していることから集落の存在が予想された。個人住宅の改築に先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

届出地の中央部に4m×4mの調査壙を設けた。層序は盛土（0.4m）、旧耕土（0.05m）、褐色土（0.1m）と堆積し、地山は粘質の黄褐色土で、南へ下降している。遺物としては3個の柱穴と溝を検出した。柱穴、褐色土から少量の土器が出土した。時期は弥生時代後期である。

所　見

台地上から南へ下降する斜面上に弥生後期の集落が在ったことが判るが、その規模等については今後の課題である。（橋本）

32. 郡家本町遺跡

所 在 地　高槻市郡家本町985－1

調査面積　120㎡

調査期間　昭和54年7月9日～7月12日

調査経過

郡衙背後の南側斜面上にあたり、台地上には弥生後期の集落があったとみられるところから、その拡がりを知るために個人住宅建設に先立って発掘調査を実施した。

遺構・溝物

届出地の一部に3m×3mの試掘壙を設けた。層序は盛土（0.5m）、旧耕土（0.1m）、床土（0.15m）と堆積し、その下の地山は黄灰色砂礫層が厚く堆積する。遺構・遺物は検出されなかった。

所　見

弥生時代後期の集落が、南側斜面には拡がっていないことが明らかとなった。（橋本）

33. 郡家本町遺跡

所 在 地　高槻市郡家本町926－3

調査面積　187.14㎡

調査期間　昭和54年9月27日～10月9日

調査経過

当調査区は清福寺方面から郡家本町の集落内を通る道路に面し、この地域は従来民家が密集しているため充分な調査を実施することができなかった。今回、個人住宅改築に先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

約0.4mの盛土を除去すると、黄灰色土（0.1m）、暗褐色土（0.3m）と堆積し、地山は砂礫を含む黄褐色土である。数個の柱穴を検出したが、調査区が狭小な為、詳細は不明である。柱穴内から古墳時代の土師器・須恵器の破片が出土している。

所　見

郡家本町の集落内にも古墳時代以降の集落が拡がっていることがわかったが、詳細は今後の課題である。（大船）

34. 郡家今城遺跡

所 在 地　高槻市郡家新町54番地

調査面積　432㎡

調査期間　昭和54年11月15日～11月17日

調査経過

当該地は郡家今城遺跡の中心部から約80m北寄りに位置しており、遺跡の拡がりを確認するため調査を実施した。

遺構・遺物

調査は幅3.5m、長さ12mのトレンチを設けておこなった。層序は耕土（0.2m）・整地層（0.3m）・灰褐色粘土層〔地山〕で、遺物包含層及び遺構は認められなかった。

なお、灰褐色粘土層を掘り下げると、ところどころで、灰白色の火山灰が認められた。

所　見

調査範囲が狭少なためか、奈良時代～平安時代にかけての遺構・遺物は認められず、集落の外辺にあたるものと思われる。また、旧石器時代資料を探索したが得られなかった。（森田）

35. 皇子塚古墳

所 在 地　高槻市氷室町5丁目3の1

調査面積　1,135㎡

調査期間　昭和54年8月20日～8月22日

調査経過

従来から円墳と考えられてきた当古墳を教育用施

設として活用すべく、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、調査を実施した。

遺構・遺物

墳頂部と思われるところに十字状のトレンチを設定したが、何も得られなかったので、重機を用い墳丘の断ち割りをおこなった。その結果、埋葬施設らしきものは全く発見されなかった。断面に見る層序観察では、地山は灰褐色粘土層と砂層の互層になっており、その上面は東から西への緩やかな傾斜を認めた。

所　見

当該地は、おそらく池を造成するにあたって、周囲の土を削り取ったために、墳丘状の高まりが生じ、古墳と見なされたものと思われる。なお当該地周辺は「皇子塚」という小字が残っているところから、後世皇子塚古墳と呼称され、伝承されたものと考えられる。（森田）

36. 大蔵司遺跡

所 在 地　高槻市大蔵司3丁目122－1・116・117

調査面積　2,591㎡

調査期間　昭和53年4月4日～5月4日

調査経過

当該地区周辺のこれまでの調査によって、古墳時代の住居址や奈良時代の倉跡などが検出されている。今回、市場建設に先立って、発掘調査を実施した。

遺　構

耕土・床土を除去すると、茶灰色ないし暗茶灰色の土層（0.1～0.3m）〔遺物包含層〕を検出し、地山は、黄茶褐色土と灰色バランス層のところがある。遺構としては、弥生時代後期の竪穴式住居址3基、井戸1基、大溝、古墳時代の竪穴式住居址2基、奈良時代の掘立柱建物跡2棟、土壙などがある。なかでも大溝から検出された大量の弥生式土器は好資料である。

遺　物

弥生時代後期の土器をはじめとして、古墳時代前期、奈良時代の土器が出土している。また、古墳時代の溝状遺構から墳輪片が出土している。

所　見

大蔵司遺跡での初の大規模な発掘調査であるが、弥生時代から奈良時代に至る遺構・遺物を多く検出した意義は大きい。今後遺跡の時間的、空間的拡がりを追求する必要がある重要な遺跡の一つとなろう。（森田）

37. 大蔵司遺跡

所 在 地　高槻市大蔵司2丁目126－1

面　　積　759.85㎡

調査期間　昭和53年5月26日～30日

調査経過

当調査区の北側で、奈良時代の遺構が、東側では弥生時代を中心にした遺構・遺物が数多く検出されており周辺にもかなり拡がっていることが予想された。今回、店舗付住宅の建設が計画されたため関係者と協議の結果、発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

耕土を除去すると芥川の旧河流らしい青灰色の砂礫層が厚く堆積しており、遺構はまったく検出されなかった。土師器の細片が若干出土した。

所　見

遺構の西への拡がりを知る手がかりとともに、古代の芥川の流路を知る手がかりをえた。（橋本）

38. 大蔵司遺跡

所 在 地　宮ノ川原4丁目569－7

調査面積　1,650.01㎡

調査期間　昭和53年11月30日

調査経過

当該地は服部地区のほぼ中央にあたり、大蔵司遺跡の北隅部分に相当すると考えられているところである。今回、保育所建設に先立って遺構確認調査を実施した。調査は幅2m、長さ20mのトレンチを東西2本、南北2本設定しておこなった。

遺構・遺物

層序は、耕土（0.2m）、黄灰褐色砂礫土層〔地

山〕である。全体に芥川の濫乱による堆積した砂礫で、遺構は検出されなかった。

遺物は若干の瓦器・土師器・須恵器片がみられた。

所　見

大蔵司遺跡は当該地より南に拡がることが明らかになった他、芥川の濫乱原と思われる堆積砂礫内に若干の遺物がみとめられることから、北に位置する宮ノ川原遺跡は芥川によってかなり削られている可能性を考えなくてはならないであろう。（冨成）

39. 大蔵司遺跡

所 在 地　高槻市浦堂1丁目254、他

調査面積　2,500㎡

調査期間　昭和55年6月3日～9月18日

調査経過

大蔵司遺跡の西半分については、昭和47・53年の発掘調査で弥生～奈良時代の遺構・遺物が数多く検出されているが、東半分については、全く不明であった。ところが昨年度、府立芥川高校の建設に先立ち、遺跡範囲の確認調査をおこなったところ、高校敷地の南半分で遺物の出土がみとめられ、今回の事前調査となった。調査は、体育館・プール・フェンスの予定地3ケ所についておこなった。

遺　構

遺構のみとめられたのは体育館予定地の調査区のみで、他の調査区については、自然流路等から遺物が出土している。検出された遺構としては、中世の水田址・杭列・溝および水田址に残された人と牛の足跡、平安時代の溝2本、柵状遺構2ケ所、奈良時代の溝とその護岸施設などがある。全体として、水田やそれに伴う施設の遺構が多く、生産活動の場であることがわかる。

遺　物

遺物としては、土器類と木製品がある。土器類は弥生時代中期～鎌倉時代にかけてのもので、弥生式土器、土師器、黒色土器、瓦器などが出土している。木製品は、奈良時代の溝と平安時代の溝から検出されており、3点の木簡をはじめとして、祭祀具・食膳具・服飾具・紡織具・履物・農工具などがあり、さらには棒状具・焚木・火付木なども多く検出されている。

所　見

今回調査したところは、大蔵司遺跡の東部にあたり、検出した遺構は各時代を通じて、生産の場に関連するものが多くみとめられた。これまでの西部の調査では、居住区を示すものが検出されており、これらと一体となるものであろう。遺物では、溝から検出された多くの木製品が注目され、その多くは祭祀に関わるものと見なされる。（森田）

40. 大蔵司遺跡

所 在 地　高槻市大蔵司2丁目202

調査面積　841㎡

調査期間　昭和55年10月20日～11月6日

調査経過

昭和47年の初の発掘調査以来、遺跡の拡がりと遺構の有無を確めるべく、継続的に調査を実施してきた。今回もその一環としておこない、とくに当該地は遺跡の中心部と考えられるところから、北へ約150m隔った地点でもあり、大規模トレンチを設定して調査を実施した。

遺　構

予定地内の南北に2ケ所のトレンチを設定して調査した。南側のトレンチ（2.5×8m）では、古墳時代の包含層と中世の竪穴状の落ち込みを検出した。中世の落ち込みは、床土下で検出され、中世の遺構面は、水田造成時にすでに削平されているものと思われる。北側トレンチでは、古墳時代の包含層は認められず、中世包含層直下で旧河道を検出した。中世の遺構としては溝1条と石積井戸1基がある。溝は幅0.3m、深さ0.1mの小規模なものである。井戸は、上辺がすでに削平されている。現存する法量は、掘り方径1.7m、上端内径1.2m、底径0.65m、深さ1.3mを測る。石積みは、人頭大ないしそれより一まわり大きい河原石を用い、平積みにして築かれていた。時期は、出土遺物からみて13世紀

頃と考えられる。

遺　物

南側のトレンチから、布留式併行期と考えられる土師器の甕や5世紀代の須恵器が出土している。包含層が良好な割に遺物の包含量は少ない。北側のトレンチからも、5世紀代の須恵器、（蓋坏・高坏）が出土している。また井戸からは、瓦器椀や土師皿が出土している。

所　見

今回の調査で古墳時代の包含層と中世の遺構が確認されたことから、大蔵司遺跡の時間的・空間的拡がりが増大したといえる。これまで、遺跡の本体については、南寄りのところと考えられてきたが、当該地区の調査の結果、今後、周辺地域の本格的な発掘調査が望まれる。（森田）

41. 大蔵司遺跡

所 在 地　高槻市宮ノ川原4丁目564－6

調査面積　876 ㎡

調査期間　昭和55年11月25日～11月29日

調査経過

当該地は大蔵司遺跡と宮ノ川原遺跡の中間に位置しているため、両遺跡の拡がりを確認すべく調査を実施した。

遺構・遺物

調査はトレンチ（5.5 m×2.5 m）を設定しておこなった。層序は、盛土（0.9 m）、旧耕土（0.2 m）、灰褐色砂礫層（0.08 m）、淡茶灰色砂礫層（0.2 m）、褐色粘質土層（0.1 m）緑灰色粘質土層（0.5 m）、緑青灰色砂層（0.2 m）、緑灰色粘土層（0.4 m）、緑青灰色砂礫層（0.4 m）、青灰色粘質土層（グライ層）となり、遺物包含層や遺構面を形成するような土層は認められなかった。

所　見

本調査区およびその周辺については、遺跡の拡がりは考えられず、無遺構地帯と考えられる。しかし、当該地の東側50 mでは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての自然流路が検出されており、周辺については今後も確認調査を充実させていかなければならない。（森田）

42. 浦堂古墳

所 在 地　高槻市真上町六丁目100－1他

調査面積　59,151 ㎡

調査期間　昭和55年3月11日

調査経過

当該地は、日吉台小学校の南西約200 mの西向き尾根上である。標高は90 mを測る。昭和45年の遺跡分布調査において、埴輪片が1点採集され、丘陵の立地条件などと考え合せ、前方後円墳の存在が推定されてきた。今回、大規模な宅地造成が計画されたため、事前に古墳の確認調査を実施した。

遺　構

調査は古墳の墳頂部と目される部分に、トレンチを4ケ所設けておこなった。層序は表土（0.2 m）、黄赤褐色含礫土層〔地山〕となり、盛土および墓拡等の遺構は検出できなかった。また埴輪の散布もまったく認めることができなかった。

所　見

今回の調査結果によって、浦堂古墳と呼ばれていた前方後円墳は実存しなかったことになり、当該地北側300 mに立地する芝谷古墳のみが、日吉台丘陵西側で唯一の前方後円墳である。（大船）

43. 宮田遺跡

所 在 地　高槻市宮田町三丁目3－4・5

調査面積　173 ㎡

調査期間　昭和53年5月29日～5月31日

調査経過

当該地は春日神社より南100 mに位置し、現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は、届出地中央部に5 m角のトレンチを設けておこなった。層序は耕土（0.2 m）のみで、その下はすぐ地山の黄褐色粘土層になり、遺構・遺物は

まったく検出されなかった。地山面は標高２１ｍを測る。

所　見

調査地の水路を隔てたすぐ北側は、柱穴・溝・井戸跡が検出される宮田遺跡の住居地域である。昭和４５年の東区の調査結果によれば、住居地のすぐ南側は水田であったらしく、水路跡以外の遺構は検出されなかった。今回は調査範囲が狭少であったために、何も検出されなかったが、水田跡であった可能性がある。（大船）

44. 宮田遺跡

所 在 地　高槻市宮田町３丁目２－17

調査面積　310 ㎡

調査期間　昭和53年９月28日

調査経過

当該地は、宮田遺跡の西端部にあたる地域で今回、住宅建設に先立って遺跡の拡がりを確認すべく、調査を実施した。

遺構・遺物

調査は２ｍ×２ｍのトレンチを設けておこなった。層序は、表土層（0.2ｍ）、黄灰色土層（0.2ｍ）、茶灰色土層（0.3ｍ）、黄灰色粘質土層（地山）となる。茶灰色土層は宮田遺跡でみられる遺物包含層と同一層であるが、遺物は検出されなかった。また、調査区が狭少なためか、遺構も検出されなかった。

所　見

遺物包含層の状況からして、遺跡地内であるのは確実であるが、小規模な調査の為、明確な遺構を検出できなかった。今後の周辺地区での大規模調査に期したい。（森田）

45. 宮田遺跡

所 在 地　高槻市宮田町３丁目５

調査面積　１００㎡

調査期間　昭和53年10月11日

調査経過

宮田の春日神社周辺からは中世の集落跡が検出されているが、神社境内に防火貯水槽が設置されることになり、関係者と協議の結果、発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

貯水槽が設けられる１０ｍ×１０ｍの掘り方の断面観察を中心に調査を実施した。盛土（0.7ｍ）下は黄灰色粘土が厚く堆積するのみで、遺構・遺物は検出されなかった。

所　見

古い時期から春日神社がこの地に鎮座していたことが想像されるが、これまでに検出されている中世集落との関連を追求していくと、中世の庶民信仰との関わりに興味ある問題があろう。（橋本）

46. 宮田遺跡

所 在 地　高槻市宮田町三丁目１－８

調査面積　91 ㎡

調査期間　昭和54年２月22日

調査経過

当該地は春日神社より南150ｍに位置し、現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は東西２ケ所に、２ｍ角のトレンチを設けておこなった。西トレンチの層序は、盛土（0.3ｍ）・暗灰褐色砂質粘土層（0.4ｍ）〔包含層〕・黄灰色粘土層〔地山〕となり、東トレンチの層序は、耕土（0.3ｍ）・床土（0.03ｍ）・暗灰色砂質土層（0.4ｍ）〔包含層〕・黄灰色粘土層〔地山〕となる。地山面は標高２0.1ｍを測る。遺構は両トレンチともまったく認められなかった。

遺　物

西トレンチの出土遺物は、磁器片１点・瓦器椀片数点・土師器皿片数点であり、東トレンチの出土遺物は、土師器甕１点・土師器皿数点である。いずれも細片であって、完形に復元することができなかった。

所　見

宮田遺跡における遺構の分布は、これまでの大規模な数次の調査によって、屋敷地は北側に、水田址は南側に拡がっていることが明らかとなっている。今回の調査地は、水田址の範囲と推測される地域であり、暗灰色砂質土層〔包含層〕は当時の水田面であった可能性が非常に高い。（大船）

47. 宮田遺跡

所 在 地　高槻市宮田町三丁目 47－ 1、47－9
47－10、48－4

調査面積　897 ㎡

調査期間　昭和 54年 10月 15日～11月 16日

調査経過

当該地は春日神社より南90 mに位置し、東側は昭和52年8月の調査地に接している。現状は宅地である。今回、工場跡地において高層住宅の建設工事が予定されたため、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

層序は盛土（0.2 m）・耕土（0.2 m）・黄褐色土層〔地山〕であり、包含層は認められなかった。検出した遺構は、東側屋敷地と区画する南北溝3条と多数の柱穴・井戸1基で、東側の調査区と同様な屋敷地がまだ西に続いている。しかし、今回の調査地は、工場跡地であるため、撹乱を受けた部分が多く、遺構の全貌を知ることができない。

遺　物

今回の出土遺物は中世のものだけである。溝・柱穴・井戸等の遺構に伴って、少数の瓦器・土師器・須恵器・陶器・塼片などを出土した。

所　見

中世の宮田遺跡の屋敷地は、東西に細長く延びていたらしく、本遺跡の西辺部にあたる今回の調査地でも、重複する多数の建物群を検出した。現在では東西両端の屋敷地のみしか明らかにされていないが、集落の構成を考える上で貴重な資料である。（大船）

48. 宮田遺跡

所 在 地　高槻市宮田町三丁目 87 － 13

調査面積　83 ㎡

調査期間　昭和 55年 3月 26日

調査経過

当該地は春日神社の南約 150 mに位置し、西側は府道萩谷－西五百住線に面している。現状は宅地である。今回、分譲住宅の建築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は届出地の中央部に2 m角のトレンチを設けておこなった。層序は盛土（0.1 m）・耕土（0.07 m）・床土（0.02 m）・灰褐色土層〔整地層〕（0.13 m）・黄褐色土層〔地山〕である。調査地からはまったく遺構・遺物を検出することができなかった。

所　見

調査範囲が狭少なため、遺構・遺物を検出することができなかったが、これまでの調査によって、集落址の南面に拡がる水田址であった可能性が高いところである。（大船）

49. 氷室塚古墳

所 在 地　高槻市氷室町2丁目 571 － 8

調査面積　120 ㎡

調査期間　昭和 55年 6月 10日～6月 21日

調査経過

当該地は氷室塚古墳の東側の濠と推測される位置にあたる。現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は調査地が周濠の跡と考えられるところから、中央部に東西2 m、南北3 mのトレンチを設け、重機を使用しておこなった。層序は盛土（1.6 m）・黒色砂質土層（0.4 m）・黄灰褐色粘土層〔地山〕である。黒色砂質土層は池底の堆積土と考えられるが、埴輪類の遺物はまったく包含されていなかった。

所　見

今回の調査は、調査範囲が狭少なこともあって、氷室塚古墳に関する遺構・遺物を検出することがで

きなかった。（大船）

50. 氷室塚古墳

所 在 地　高槻市氷室町2丁目91－1～3
調査面積　243 ㎡
調査期間　昭和55年6月23日～6月30日
調査経過

当該地は氷室塚古墳の南東部にあたり、現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は調査地中央部の南と北側に、3 m角のトレンチを設けておこなった。層序は盛土（0.7 m）・耕土）0.2 m）・茶褐色粘質土層〔地山〕であり、床土・包含層は認められなかった。地山面でも遺構・遺物を検出することができなかった。

所　見

今回の調査地と北側の周濠推定地とは、距離にして約20 mであったが、地山のレベルは約1 mの差があり、周濠は円形に一巡していない。氷室塚古墳は南向きの前方後円墳になる可能性が高い。（大橋）

51. 塚脇古墳群

所 在 地　高槻市塚脇1丁目2309
調査面積　1,333 ㎡
調査期間　昭和55年11月12日～11月20日
調査経過

当該地は塚脇の中心部に位置する唯徳寺のすぐ東側にあたり、現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は塚脇8号墳（円墳）〔連塚〕と接する南東部に周濠を確認するため、南北2 m、東西4 mのトレンチを設けておこなった。層序は表土（0.1 m）で、その下は黄褐色礫層〔地山〕となり、周濠および遺物はまったく検出されなかった。

所　見

8号墳の墳丘規模は径14 m、高さ2.5 mと推測されていたが、今回の調査地まで古墳の周濠が拡がっていないことが確認された。（大船）

52. 富田遺跡

所 在 地　高槻市富田町6丁目12－32番地
調査面積　267 ㎡
調査期間　昭和54年9月5日
調査経過

当該地は富田遺跡の南端部にあたり、丁度段丘の末端に位置する。今回遺跡の拡がりを確めるべく、調査を実施した。

遺構・遺物

調査は、幅1 m・長さ10 mの南北トレンチを設定しておこなった。トレンチ中程で、西側へやや拡張したところ、径約0.5 mのピットを検出。埋土には焼土・炭などを含んでいた。またトレンチの東半分に、南北方向の溝状遺構を検出した。埋土は、ピットと同様、焼土・炭を含んでいた。遺物としては、整地層中より土師器片や窯壁片と思われるものを検出している。

所　見

富田遺跡を標傍する弥生時代・古墳時代・中世の遺構はまったく検出されず、江戸時代から明治時代にかけての瓦窯に関連すると考えられる遺物（窯壁片など）を検出した。以前の富田遺跡の調査でこの時期の瓦窯を調査しており、それとの関連が考えられる。（森田）

53. 富田遺跡

所 在 地　高槻市富田町六丁目2547
調査面積　159 ㎡
調査期間　昭和55年3月17日～3月19日
調査経過

当該地は三輪神社の南100 mに位置し、現状は畑地である。今回、個人住宅の新築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は申請地に幅1m・長さ3mのトレンチを設けておこなった。層序は耕土（0.3m）・黄褐色含礫土層〔地山〕で、包含層および遺構・遺物はまったく検出することができなかった。

所　見

富田遺跡が位置する台地の先端部は、小さな谷が複雑に何本も走っており、遺跡の範囲を明確にできないところである。当該地は遺構が密に分布する西・北側の地区と、小さな谷によって区画されており、遺構の拡がりがおよんでいないことが判明した。（大船）

54　富田遺跡

所 在 地　高槻市富田町4丁目2527

調査面積　37㎡

調査期間　昭和55年4月11日～4月12日

調査経過

当該地は富田小学校跡地の南20mに位置し、現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は建物基礎と残土の関係から、調査地の東・西側に2m×2mのトレンチを2ケ所設けておこなった。層序は表土（0.1m）・褐色土層（0.1m）〔包含層〕・黄赤色粘土層〔地山〕である。

検出した遺構は、西トレンチでは幅1m、深さ0.25mの東西溝と径0.15～0.4m、深さ0.1mの柱穴3個があり、東トレンチでは径0.25～0.5m、深さ0.1～0.3mの柱穴2個と浅い落ち込みがある。遺構の埋土は、暗褐色土層である。

遺　物

出土遺物は、包含層から瓦器・土師器・須恵器・陶器・瓦の細片が若干出土した他、各遺構からも同じ種類の遺物が少量出土している。これら出土遺物の多くは、椀・皿・甕類の日用雑器であるが、その他に東西溝出土の鉄釘2点と包含層出土の須恵質土錘1点がある。

所　見

今回の調査は、調査範囲が狭少なこともあって、遺構全体の性格等は不明であるが、富田小学校跡地の中世集落の南隅は、さらに南まで拡がっていることが推測された。（大船）

55. 富田遺跡

所 在 地　高槻市富田町6丁目2767

調査面積　409㎡

調査期間　昭和55年11月21日～11月22日

調査経過

当該地は善門寺の南西約150mに位置し、現状は宅地である。今回、個人住宅の改築工事に先立って、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は中央部に南西2m、東北4mのトレンチを設けておこなった。層序は表土（0.1m）で、包含層などはなくその下はすぐに地山の黄褐色粘土層になる。

検出した遺構は、径0.1～0.6m、深さ0.1～0.35mの大小の柱穴10数個と幅0.3m、深さ0.1m、長さ3mの東西溝1条がある。遺構の埋土は、黄茶褐色～暗褐色土層で、少量の土器片が出土した。

遺　物

出土遺物は柱穴・溝の埋土からのものでって、小さな土器が大部分である。弥生時代後期に属する遺物は、他の時代のものに比べて多く出土しており、タタキ目を有する甕腹片・壷底部・壷口縁部片がある。古墳時代の遺物は、比較的大きな柱穴から6世紀後半の須恵器片が数点出土している。また、奈良時代の須恵器片も、同じ大きな柱穴から出土する。平安時代の遺物としては、黒色土器細片が2点程ある。

所　見

今回の調査地は、富田遺跡の南辺部が少し高台になったところに位置する。調査範囲が狭少なため詳細は不明であるが、弥生時代から平安時代の住居地域が付近に存在していた可能性が高い。（大船）

56. 中城遺跡

所 在 地　高槻市昭和台町二丁目155－1

調査面積　198㎡

調査期間　昭和55年3月6日

調査経過

当該地は慶端寺のすぐ北側にあたる。現状は宅地である。今回、個人住宅の改築に先立ちて、事前に発掘調査を実施した。

遺　構

調査は申請地の中央部2m×3mのトレンチを設けておこなった。層序は盛土(0.15m)・黄褐色粘土層(0.05m)・暗茶褐色土層〔包含層〕(0.2m)・黄褐色礫土層〔地山〕である。

検出した遺構は、調査範囲が限られたため、落ち込み1ケ所と柱穴13ケ所である。これらの遺構はいずれも深さが0.1～0.2mと浅く、削平されていた可能性が高い。埋土は暗茶褐色土層である。

遺　物

柱穴2ケ所からは、6世紀の須恵器片と弥生式土器片が出土した。その他、包含層からも弥生時代後期中頃～古墳時代にかけての土器片が少数出土している。

所　見

富田台地の先端部に位置する中城遺跡は、今までの出土遺物などによって、中世の集落跡であると考えられていた。今回の調査は、範囲も狭少なため詳細は不明であるが、弥生時代後期から連綿と続く遺跡であるらしいことが判明した。(大船)

57. 柱本遺跡

所 在 地　高槻市柱本南町699他

調査面積　30㎡

調査期間　昭和55年12月5日

調査経過

当該地は柱本遺跡の西南部に位置している。昭和54年6月に府立鳥飼高校予定地内に15ケ所のトレンチを設け、遺跡範囲確認調査をおこなったところ、敷地北端部において遺物包含層を検出した。今回、鳥飼高校のフェンス設置の事前調査として実施した。

遺　構

フェンス予定地に2ケ所の調査区を設けておこなった。東区は幅1.5m、長さ17m。西区は幅1.5m長さ3.5m。両区とも層序は整合で、西側になるほど、包含層は薄くなる傾向にある。層序は盛土(0.1m)・旧耕土(0.15m)・茶灰色砂質土層(0.3m)・茶褐色砂質土層(0.05m)・暗茶灰色砂質土層(0.25m)・黄灰褐色粘土層(0.1m)〔地山〕・青灰色粘土層(0.5m以上)〔地山〕である。遺構は検出されなかったが、地山面の状況からして、大規模発掘をすれば検出される可能性は高い。

遺　物

東区トレンチの包含層から、瓦器片・土師器片若干が出土している。西区トレンチからは、地山面上で政和通宝1枚を検出している。

所　見

今回の調査は範囲が狭かったため、明確な遺構の検出には至らなかったが、遺物包含層の状況や出土遺物からみて、北側一帯に中世の集落跡が拡がっていると予想される。また、範囲確認調査で検出した弥生時代の包含層は、今回検出されなかったが、もう少し西側にあるものと思われる。(森田)

58. 上田部遺跡

所 在 地　高槻市上田辺町

調査面積　150㎡

調査期間　昭和54年1月16日～1月31日

調査経過

当該地は、上田部遺跡の北端部にあたると考えられるところで、今回、市街地再開発事業に伴う阪急高架工事に先立つ試掘調査として実施した。

遺構・遺物

東西200mの範囲に合計7ケ所のトレンチを設定して調査をおこなった。そのうち、西端に設けたトレンチから、中世頃と考えられる溝を検出した。溝は幅1m、深さ0.6mを測り、南北方向の流路である。他のトレンチでは、時期不詳の小溝などを検出

したが、目立った遺構はない。遺物としては、淡青灰色粘土層から、6世紀中頃の須恵器を検出している。

所　見

当遺跡は奈良時代の集落遺跡として顕著なものであるが、今回の調査では、それに該当するような遺構・遺物は検出されなかった。ところが6世紀中頃の須恵器、（杯蓋完形品）を検出したことによって、近くに古墳時代の集落の埋もれている可能性がでてきたといえよう。（森田）

59. 天神山遺跡

所 在 地　高槻市天神町1丁目954番地

調査面積　117㎡

調査期間　昭和54年5月29日～6月6日

調査経過

天神山遺跡のこれまでの調査は、西側の丘陵でおこなわれただけで、東側の丘陵については、北山天満宮が錬座し、発掘調査はまったく行なわれていない。今回当該地において、住宅が建設されることになり、調査を実施した。

遺構・遺物

層序は、表土層（0.1 m）・茶灰色土層〔整地層〕（0.1 m）・黄褐色土層〔地山〕となり、遺構上面はすでに削平されていた。検出した遺構は弥生時代の方形周溝墓3基で、相互に連接し合っていた。時期としては、周溝内から検出した畿内第Ⅱ様式の甕が決めてになる。

所　見

最近、天神山東丘陵南端にある昼神車塚古墳の下層から、当該調査区と同時期の方形周溝墓が調査されており、この東側丘陵南半部が弥生時代の墓域である可能性が極めて強くなった。（森田）

60. 天神山遺跡

所 在 地　高槻市天神町1丁目10－86番地

調査面積　793㎡

調査期間　昭和56年1月28日

調査経過

当該地は、天神山丘陵の東支脈の南寄りに位置し、北山天満宮の1部とその斜面にあたる。これまでの東支脈の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓群が確認されているところから、調査を実施した。調査は丘陵上と斜面部にそれぞれ1ケ所づつのトレンチを設けておこなった。

遺構・遺物

丘陵部のトレンチでは、表土を除去すると黄褐色粘土層の地山があらわれ、遺構は検出されなかった。ただ弥生時代中期の壷の破片が若干出土している。土器片のうち数点は河内産の壷片である。斜面部のトレンチでは、旧斜面の一部を検出したのみで、遺構・遺物・包含層は認められなかった。

所　見

今回の調査の遺物の検出状況からみて、近くの尾根上に周溝墓があったものと思われる。この東支脈南部一帯は、弥生時代中期の墓域と考えられ、天神山古墳群のあり方からみて、古墳時代に至っても墓地としての性格を有したものと思われる。（森田）

61. 古曽部南遺跡

所 在 地　高槻市古曽部2丁目170他

調査面積　4,496㎡

調査期間　昭和56年1月7日～1月22日

調査経過

当該地は、以前から須恵器の散布地として知られ、また遺跡の西方300 mに昼神車塚古墳を擁するところから、まず予定地全域にわたって遺構の確認調査をおこなった。調査は4 m×5 mのトレンチ8ケ所を設け順次実施した。

遺　構

遺構を検出したトレンチは、3ケ所である。いずれも、北寄りに設定したトレンチからの検出で、古墳時代の溝2条と、中世の頃と思われる溝1条である。

遺　物

遺物としては、各トレンチから、弥生時代～奈良

時代にかけてのものが出土している。土器類では、古墳時代初頭の土師器類若干と、同じく中頃～後半にかけての須恵器が目立った。他に用途不明の材木等を検出している。

所　見

今回の試掘調査の結果、遺物包含層である暗灰色土層の拡がりと、遺構のあり方から、古曽部南遺跡の南端がほぼ定まったといえる。そして、その主体となる時期は、５世紀中頃～後半と考えられる。また各トレンチの２次堆積土から、奈良時代の土器を含む遺物が出土しており、当該調査区の北側の高まりにも遺跡の拡がりが考えられる。（森田）

62. 昼神車塚古墳

所 在 地　高槻市天神町一丁目 117・268

調査面積　750 ㎡

調査期間　昭和53年７月11日～12月16日

調査期間

当古墳は天神山丘陵の一番南側の先端部に位置する北向きの前方後円墳である。府道真上－安満線が昼神車塚古墳の北側前方部を通過することになったため、昭和51年2月から2次にわたる調査がおこなわれてきた。今回、最終の３次調査をして墳丘盛土の発掘調査を実施した。

遺　構

調査は道路部分の墳丘を地山面まで掘り下げておこなった。墳丘の盛土は、Ⅱ段目下縁テラス下から前方部頂まで約 4.5 ｍの高さを測り、８段階の工程を経て構築されていた。その盛土を詳細に観察すると、小さなブロック状土（この大きさは、平均の厚さ0.１ｍ、径約 0.5 ｍで、その土量約 0.０２㎡である。）を積み重ねたものであることがわかった。

また、古墳々丘下では、弥生時代中期の方形周溝墓を検出したが、遺構の大部分は調査区域外にあって、規模等の詳細については不明である。その他、墳丘東裾部では、唐古第Ⅳ様式期の土器棺墓群が、隣接するような状態で多数検出されている。

遺　物

盛土中からは、旧石器時代に属する削器１点を含む他、弥生式土器片・須恵器片を若干出土した。方形周溝墓および土器棺墓から出土した弥生式土器は、ほとんど完形品の壷・甕・高坏・水差しである。その他、墳丘裾部からは少数の埴輪片と中・近世の土器細片が出土している。

所　見

昼神車塚古墳は丘陵先端部を利用して築造されたものであるが、そのほとんどが盛土であることが今回の調査で明らかになった。しかも、盛土は８段階の工程を経て構築されており、色違いによる小ブロックの堆積状況が明瞭に判別できる例として貴重である。また墳丘下で検出した弥生時代の墓地群は、天神山遺跡の墓域のあり方を知る上に重要である。（大船）

63. 奥坂古墳群

所 在 地　高槻市別所本町 30 －１

調査面積　210 ㎡

調査期間　昭和53年５月11日～５月 18日

調査経過

昭和50年、市立奥坂小学校の建設時に、３基の古墳を発掘調査したが、その東側の尾根に４基の古墳が存在することが知られていた。今回、分譲住宅が建設されることになり、府教委および関係者と協議の結果、造成予定地にかかる２基について発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

調査を開始する以前に古墳の位置する尾根の東側部分が造成工事で削られており、古墳も一部が削除されたようである。調査の結果一基（Ａ３号墳）は古墳とは認められず、単に地山が高まっているだけと判明した。もう一基（Ａ４号墳）は推定直径１２ｍの円墳で、墳丘の裾部を削って２～2.5 ｍの濠がめぐらされており、濠内から埴輪の破片が検出された。盛土はほとんど盛っておらず、主体部についても検出することはできなかった。石室に使用したような石材も付近には見当らないところから木棺直葬

墳とみられる。

所　見

以前、調査を実施した時に、検出した小形の横穴式石室を有する終末期の古墳や木棺直葬墳が古曽部・別所付近には散在しており、安満遺跡を中心とした古墳時代の村落との関連を考えるうえで重要である。（橋本）

64. 奥坂古墳群

所 在 地　高槻市別所本町30－1

調査面積　44,392㎡

調査期間　昭和55年4月10日～5月1日

調査経過

奥坂小学校建設時に2基の古墳を調査し、その後、53年度に2基（A3・A4号墳）の調査を行なったが、そのうち1基（A3）は古墳と認められなかった。今回、A1～A4号墳のある東側尾根部分の宅地造成（マンション建設）に先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

東側尾根部分の崖面に断面が露出していたA1号墳は調査の結果、主体部は木棺直葬であるが、崖で大半が削られているため規模は不明である。また、墳形は推定7～8mの円形とみられる。約10m離れて、南北長約9m、濠幅約1mの方形墳を検出した。以前から判明していたA2号墳とみられ、主体部は中央部に木棺を直葬している。中央部は木の根で撹乱されており、期模は不明である。A1、A2号墳の濠内から墳輪の破片が出土しているが、小破片であり形状は不明である。また、届出地の東南部で墳丘らしい盛り上がりについて調査を行なったが遺構・遺物は検出できなかった。

所　見

53年度に調査したA4号墳がやはり木棺直葬墳とみられ、第8中学校建設時に調査した紅茸山遺跡から木棺直葬を主体とする方形墳が約10基検出されている。今回の調査分とあわせて各尾根ごとに木棺直葬墳が築かれていることが判った。これらの小古墳と鏡や鉄製品を所有する紅茸山C1号墳・あるいは奥坂古墳との関係解明もこの地域を理解するうえで重要である。（橋本）

65. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町269

面　　積　264㎡

調査期間　昭和53年7月24日～25日

調査経過

安満遺跡の東部で、当調査区の東側も52年度に調査をしたところ、中世の掘立柱建物等を検出している。今回、分譲住宅の建設が計画されたため、関係者と協議の結果、発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

表土（40cm）を除去すると、桧尾川の旧河床とみられる暗褐色あるいは青灰色の砂礫層が複雑に堆積しており、遺構・遺物はまったく検出されなかった。

所　見

52年度の調査でも桧尾川の旧河床とみられる砂礫層の堆積した部分が検出されており、中・近世でも桧尾川が氾濫をくり返していたらしい。（橋本）

66. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町253－1

調査面積　2,200㎡

調査期間　昭和53年11月20日～54年1月24日

調査経過

安満遺跡の東部地区で周辺部から奈良時代以降の建物群が検出されているため、今回分譲住宅の建設に先立って発掘調査を実施したものである。

遺構・遺物

調査区の西側で建物の東部を柵列で囲まれた建物と井戸を検出した。柱通りは約12°東へ振るもので、東西5間（柱間1.65m）×南北3間（柱間1.6m）の建物1と東西1間（柱間1.6m）×南北2間（柱間1.6m）の建物2がある。建物1のすぐ南側に直径0.8m、深さ0.75mの井戸1があり、曲物を三段重ねている。時期は奈良時代とみられる。

調査区の東側で奈良時代の井戸２を検出したが、直径約３ｍ、深さ約1.6ｍで元来石組井戸でみられる。内部から墨書のある須恵器や土師器・刀子状木製品が出土している。墨書は「益田」・「阿」・「馬主」などがあり、井戸の祭祀関係であろうか。

他に調査区東側では隅丸方形を呈するもので１０基検出される。内部から黒色土器、瓦器が出土している。近辺に、同時期とみられる井戸が２基検出されている。

調査区の西北部で直径１～1.5ｍ・深さ0.6～0.7ｍを測る井戸状の土壙が検出され内部から布留式土器が出土している。

所　見

古墳時代の集落が桧尾川氾濫原に拡がっていることが判り、また、奈良時代以後の集落が栄えたことが判る。

67. 安満遺跡

所 在 地　高槻市八丁畷町

調査面積　700㎡

調査期間　昭和53年12月２日～54年１月13日

調査経過

当該地は安満遺跡の南部にあたり、今回、市街地再開発事業の一環として、阪急高架工事がおこなわれるのに対する事前試掘調査である。

遺構・遺物

調査は、線路沿いに平行して、７ケ所のトレンチを設けて実施した。番号は西側から順に付した。

トレンチ１（幅３ｍ・長さ５２ｍ）では、弥生時代前期の大溝と時期不明の溝・落ち込み等を検出。遺物としては、大溝より縄文晩期の土器片と弥生時代前期の土器片を検出。

トレンチ２（幅１ｍ・長さ１９ｍ）では、自然流路の一部とピットを検出。遺物としては灰褐色粘土層より、大形石庖丁の一部らしきものを検出している。

トレンチ３（幅２ｍ、長さ１7.5ｍ）では、弥生時代中期の土壙墓、溝などを検出。なお調査区域外にも土壙墓らしきものを検出している。遺物としては、土壙墓から把手付壷・壷などを検出している。また、トレンチ中央やや西寄りのところで、高杯の脚部を蓋にした壷棺１基を検出した。その他蛤刀石斧の刀先片が出土している。

トレンチ４（幅３ｍ、長さ１８ｍ）では、遺構は検出されず、包含層から弥生時代前期の土器を検出している。

トレンチ５（幅３ｍ、長さ１５ｍ）では、遺構は検出されなかった。遺物は撹乱をうけた包含層から若干の弥生式土器片を検出したのみである。

トレンチ６（幅３ｍ・長さ１６ｍ）では、若干のピット類を検出するも、まとまったものにはならなかった。また目立った遺物もない。

トレンチ７は掘さくするも、自然流路の跡で、湧水激しく調査不能であった。

所　見

今回の調査は、遺跡地の南端にあたり、遺構の希薄なところと考えられてきた。しかし、弥生時代中期の土壙墓や壷棺墓を検出した意義は大きく、中期の遺構が南へ拡がる可能性が高くなった。また、トレンチ１で検出した大溝から、前期の土器とともに、縄文時代晩期の土器が出土したことは、安満遺跡の成立を考えるとき、参考になろう。（森田）

68. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町224・225－２

調査面積　1,151㎡

調査期間　昭和54年３月22日

調査経過

当調査地区は高垣町住宅地の北東隅にある児童公園の隣である。

安満遺跡の歴史時代関係の遺構が検出されている地区の北東部にあたるため、宅地造成に先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

盛土（0.4ｍ）を除去すると、旧耕土（0.2ｍ）となり、その下は撹乱された青灰色の砂礫層が厚く堆積し、遺構・遺物はまったく検出されなかった。

所　見

安満遺跡東部の拡がりの限界を知ることができた。また、この付近は数十年前に高槻市街地の造成に際して多量の土砂を採集したとのことであった。（橋本）

69. 安満遺跡

所 在 地　八丁畷町 154 － 19

調査面積　887.58 ㎡

調査期間　54 年 9 月 20 日

調査経過

安満遺跡の西部では、遺構・遺物の検出はほとんどないが、京大農場西南部では条理制遺構が検出されており、今回、宅地造成に先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

届出地に数本の試掘壙を設けたが、遺構・遺物はまったく検出できなかった。層序は盛土（ 1 m ）、旧耕土（ 0.2 m ）、青灰色土（ 0.1 m ）、黄灰色土（ 0.3 m ）、青灰色砂礫である。

所　　見

安満遺跡の西南部への拡がりの限界とみられる。（橋本）

70. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町 24 他

調査面積　3,024 ㎡

調査期間　54 年 11 月 5 日～ 11 月 22 日

調査経過

京大農場東部の高垣町地区では、弥生時代末から中世にかけての遺構・遺物が検出されており、当調査区も宅地造成に先立って発掘調査を実施したものである。

遺構・遺物

調査区の東部で中世の遺構を検出した。基本的な層序は、耕土（ 0.1 ～ 0.5 m ）、床土（ 0.05 m ）の下は灰色砂礫・黄灰色土、青灰色砂礫が数十㎝単位で複雑に推積し、この地域全体が桧尾川の旧流路とみられる。

遺構は床土を除去するとすぐに溝、井戸、土壙墓、柱穴が検出された。

土　墓・柱穴のほとんどは溝 1 の西側で検出され、この溝は幅 0.5 ～ 1 m、深さ 0.2 m を測り、やや西方に曲がりながら延び、遺構群の東部を画する性格が考えられる。

土壙墓は 4 基検出したが、土壙墓 2 ～ 4 はほぼ等間隔に一定方向に並ぶ。土壙墓 1 のみ南北方向で長さ 1.4 m、幅 0.8 m、深さ 0.1 m を測る不定形である。土壙墓 2 は長さ 1.3 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 m の方形である。土壙墓 3 は長さ 1.6 m、幅 0.6 m、深さ 0.4 m を測り、小判形である。土壙墓 4 は長さ 1.3 m、幅 0.6 m、深さ 0.05 m を測り小判形である。井戸は溝 1 と重複し、直径 1.5 m、深さ 1.1 m を測る。

溝 1 や柱穴内から瓦器・土師器・中国製陶磁器を検出したが、溝 1 から出土したものは瓦器出現期の良好な一括資料である。

所　　見

これまで、安満遺跡東部では中期の遺構・遺物が多数検出されているが、今回のように集落のなかで、溝が一単位を画するような遺構の検出ははじめてであり、中世集落の構成を与える上でも重要である。（橋本）

71. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町 25

調査面積　667.2 ㎡

調査期間　54 年 11 月 15 日～ 17 日

調査経過

安満遺跡東部で、周辺の調査ではこれまでに中世の遺構・遺物が検出されており、今回、個人住宅・賃貸住宅の建設に先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

耕土・床土を除去すると砂礫層が複雑に堆積しており、遺構・遺物を検出することができなかった。

所　　見

調査区周辺全体が、桧尾川の旧流路で、遺構が削除されたり、集落立地上不利なものとみられる。（橋本）

72. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町 246 他

調査面積　2,200 ㎡

調査期間　55 年 2 月 12 日～ 4 月 10 日

調査経過

当調査区は47年から48年にかけて発掘調査が実施された古代～中世集落遺構群の西北部にあたり、以前に検出された遺構群が拡がっていると推定されていた。今回、周辺部同様宅地造成に先立って発掘調査を実施したものである。

遺構・遺物

層序は、耕土（0.1～0.2 m）、床土（0.1～0.2 m）、暗褐色土（0.2～0.4 m）、黄灰色砂質粘土〔地山〕である。遺構としては掘立柱建物、井戸、土壙墓等を検出した。

掘立柱建物は奈良時代に属し、掘り方のしっかりしたものと、平安時代以後の掘り方の簡単なものがある。

奈良時代の建物は3棟検出された。建物3、4は約65°東へ振り、3は南北3間（柱間1.4 m）×東西2間（柱間1.9 m）、建物5は東西2間(柱間1.6 m）×南北1間（柱間1.9 m）以上である。建物5は東西2間（柱間1.6 m）×南北1間（柱間1.9 m）以上で束柱があるので倉とみられる。建物3の西南部に正位置にある蔵骨器を検出した。掘り方や配石等の施設は確認できなかった。

平安時代以降の建物は7棟検出された。101～104は5°東へ振れる。建物101は南北3間（柱間2.0 m）×東西2間（柱間1.5 m）、建物102は東西2間（柱間1.8 m）×南北2間（柱間2.0 m）、建物103は東西2間（柱間1.4 m）×南北2間（柱間1.3 m）、建物104は東西2間（柱間2 m）×南北1間以上である。建物105～107は18°東へ振る建物である。建物105は東西2間（柱間4.0 m）×南北2間（柱間1.5 m）、建物106は東西2間（柱間1.9 m）×南北2間（柱間1.4 m）、建物107は東西2間（柱間1.9 m）×南北2間（柱間2.0 m）である。全体に小規模なものである。井戸は鎌倉～室町期のものである。井戸101は直径2.2 m、深さ1.7 m、底で直径1.3 mを測る円形で、元来石組井戸とみられる。放棄後、瓦器羽釜を数個一括して投棄してあった。井戸102は石組みで、上面の直径1.5 m、深さ1.4 mを測る。井戸103は直径1.5 m、深さ2.0 m、底の直径0.9 mを測る円形である。井戸枠は無く、埋土から瓦器（椀・羽釜）、須恵器鉢が出土した。

土壙墓は23基検出したが、ほとんどが隅丸方形の小判形で、長さ1.4 m～1.5 m、幅1 m前後を測るものが多い。一部から黒色土器が出土しているが、全体的には瓦器が出土している。建物は弥生時代から中世に至る各時代のものが出土している。主に遺構に関連する中世のものとしては井戸103から出土した瓦器（椀・羽釜）、土師器皿、須恵器鉢は一括資料として良好である。井戸101出土の瓦器羽釜も南北朝期から室町期の良好な資料である。

他に緑釉・中国製青・白磁・砥石・延喜通宝なども出土している。

所　　見

調査区の東側に中世期の柱穴や土壙墓が重複して検出され、以前調査した集落址の西北への拡がりを確認することができた。建物としてまとめた柱穴はごく一部にしかすぎず、大半の柱穴はまとめることが不可能な程、多数検出され、何世代にもわたって居住したことが判る。その時期は奈良時代から室町時代にわたるものである。また、土壙墓が重複して検出されたが、中世のある時期に、集落の近くに共同墓地を営んでいたことが判る。（橋本）

73. 安満遺跡

所 在 地　高槻市八丁畷町12－1他

調査面積　200 ㎡

調査期間　昭和55年3月4日～4月5日

調査経過

当該地は、安満遺跡の南側寄りに位置し、昨年度におこなった阪急高架工事に先立つ試掘調査結果をうけて、今回の予備調査となった。

遺構・遺物

調査は合計5ケ所のトレンチ（調査壙）と2ケ所の試掘坑を設けておこなった。

トレンチ1（幅11 m・長さ12 m）は、昨年度のトレンチ1の北側に設けたもので、弥生時代前期の溝3本と井堰を検出した。溝は用水路2本と自然流路1本である。井堰は1本の用水路の北寄りで検出

した。全幅3m余で、そのうち東半分の残りがよい。構造は、溝に直交して丸太杭を4～5本打ち込み、これらの杭に横木をさしわたして骨組みをつくっている。そして、丸太をみかん割りにした板材を斜めに打ち込んでつくられている。また、この井堰の北側にも杭列があり、井堰があった可能性がある。一方、井堰の南側では橋と想定できる構造物も検出されている。遺物としては、縄文土器（晩期）と弥生土器（前期）がある。とくに弥生土器は、ほぼ完形に近い7個体の壷があり、中には彩文や木葉文で飾られたものがある。

トレンチ2（幅3m、長さ7m）では、西端で溝跡らしきものを認めただけである。遺物は、茶褐色砂質土の包含層や溝の埋土から、弥生時代中・後期の土器片が若干出土している。

トレンチ3（幅3m、長さ5m）では、弥生時代の方形周溝墓の一部を検出した。遺物としては、溝内から畿内第Ⅲ様式の壷・甕が出土している。また、トレンチの北西隅部から畿内第Ⅱ様式の甕を検出している。

トレンチ4（幅1.8m、長さ6m）では、灰色砂礫層〔地山〕の上にある茶灰褐色土層〔整地層〕から2次堆積した土器片が検出されただけで、遺構等は認められなかった。

トレンチ5（幅2.2m、長さ7.5m）でも、トレンチ4とほぼ同様のことであるが、壁面にピットを1個検出した。

試掘坑2ケ所については、遺構・遺物ともに検出されなかった。

所　見

トレンチ1で検出した井堰は、弥生時代前期の中頃と考えられ、これまでの安満遺跡の調査で得た資料の中では最も古いものである。そして、多くの壷の検出は、井堰を中心とした水の祭祀が考えられ興味深い。またトレンチ3で弥生時代中期の方形周溝墓を検出したことによって、昭和45年に調査された木棺の時期をある程度限定できるようになった。

今回の調査は、予備調査であり、今後、遺跡南部一帯での本格的な発掘調査の必要性が強く感じられた。（森田）

74. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町245

調査面積　240㎡

調査期間　55年5月20日～5月30日

調査経過

安満遺跡東部に分布する奈良時代以降の集落の一端にあたり、西側を53年度、北側を54年度に調査を実施している。今回も分譲住宅建設に先立って発掘調査を実施したものである。

遺構・遺物

調査区の東南部で中世の柱穴を多数検出したが、まとまりを欠いている。井戸は3基検出されたが、一基は直径2.4m、深さ1.0mを測り、元来石組とみられる（106）。他の2基（104、107）はいずれも直径約1.0m、深さ0.7m～0.8mで円形・素掘りである。いずれも内部から瓦器・土師器が出土する。土壙墓が5基検出されたが、西側で53年度に調査した際に検出された土壙墓と一連のものであろう。

所　見

他の調査地区と合わせて奈良時代以後、とくに中世の集落を考えるうえで重要である。（橋本）

75. 安満遺跡

所 在 地　高槻市高垣町15他

調査面積　3,267㎡

調査期間　55年12月10日～56年3月23日

調査経過

京大農場東部地域については、これまでも宅地造成に先立って発掘調査を重ねてきたが、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が多量に出土している。当調査区は51年度に調査を実施し、数基の方形周溝墓を検出した地区に隣接するところから方形周溝墓群の拡がりを追求できるものと期待されていた。今回宅地造成に先立って発掘調査を実施した。

遺構・遺物

調査区全体に旧桧尾川の氾濫によって運ばれた砂

礫層が厚く堆積している。基本的には、耕土・床土・黄褐色砂礫土層（0.3～0.4 m）、黄褐色粘土層（0.1～0.2 m）、灰色粘土層（0.3～0.5 m）、暗灰色粘土層（0.2 m）、地山は黄灰色砂質粘土層あるいは青灰色砂礫層である。

検出した遺構は弥生時代中期の方形周溝墓33基と溝状遺構である。方形周溝墓はいずれも周溝を共有しながら連なっている。主として東西方向に列ぶが、これと異なる方位で、二・三基で一つのグループをつくるものがあり、詳細に検討するも4～5グループに分けられる。以下各周溝墓ごとの概要を記す。

1号周溝墓　東西8.5 m、溝幅1.0 m、深さ0.3 mを測る。南北長不明

2号周溝墓　1号周溝墓に隣接。溝幅2 m、深さ0.3 mを測る。東南隅のみ検出。

3号周溝墓　1・2号周溝墓の南に位置する。東北隅を検出。溝幅1.5～2.0 m、深さ0.3 m。溝内に第Ⅱ～第Ⅲ様式期の壷・水差・甕を、また、溝底から遊離して第Ⅴ様式期の甕を検出。

4号周溝墓　3号周溝墓の東に隣接。溝幅0.6～1.0 m、深さ0.1～0.3 m、東西長7.5 m、東西隅に土を検出する。

5号周溝墓　溝幅0.9 m、深さ0.3 m、東南部のみ検出する。

6号周溝墓　5号周溝墓の東に隣接。

7号周溝墓　5号周溝墓の南に隣接、連続しない周溝である。

8号周溝墓　東西7.2 m、南北6.5 mで西と東の隅は陸橋部となる。

9号周溝墓　北東隅を検出。溝幅2 m、深さ0.5 mを測る。

10号周溝墓　8号周溝墓に隣接。東西4.5 m、南北3.5 m。

11号周溝墓　10号周溝墓に隣接、東西3.7 m、南北3.0 mである。

12号周溝墓　東西7.5 m、南北5.5 m、溝幅1.0～1.5 m、深さ0.4～0.5 mの周溝がめぐる。

13号周溝墓　12号周溝墓の西に隣接。東西9.0 m、南北7.0 m、12号周溝墓より新しい。

14号周溝墓　12号周溝墓の東に隣接。東西8.5 m、南北7.5 m。

15号周溝墓　12号周溝墓の北に位置する。幅1.5 m、幅0.4 mの溝がL字形にめぐる。周溝内に長さ2.0 m、幅0.8 m、深さ0.15 mの長方形土壙を検出する。

16号周溝墓　13号周溝墓の南に隣接。東西7.5 m、南北5.5 m。南側周溝は19号に削られる。

17号周溝墓　12・14号周溝墓の南に隣接。南北6 m、東西9 m、周溝内から第Ⅱ様式期の高杯、第Ⅲ様式期の壷を検出。

18号周溝墓　16号周溝墓の西に位置する。溝幅2 m、深さ0.2 mを測る。

19号周溝墓　16・17号周溝墓を削り、東西9.5 m、南北7 m、溝幅は2～3 mを測る。

20号周溝墓　19号周溝墓の南に隣接。東北隅を検出。

21号周溝墓　東北9.5 m、南北7～8 m。溝幅2 m、深さ0.2～0.5 mを測る。第Ⅱ様式期の高杯・甕・壷を検出。

22号周溝墓　21号周溝墓の南西隅に接し、東北隅を検出。

23号周溝墓　21号周溝墓の南に隣接。東西9.0 m、南北6.5 m。

24号周溝墓　23号周溝墓の東に隣接する。東西7.5 m、南北8.0 m。

25号周溝墓　24号周溝墓の東南隅と接する。西北隅の一部を検出。

26号周溝墓　21号周溝墓の東に隣接する。東西9 m、南北10 m。

27号周溝墓　26号周溝墓の東に隣接する。西北隅を検出する。

28号周溝墓　26号周溝墓の北に位置する。東西6 m、南北5 m、西北隅が陸橋となる。

29号周溝墓　28号の東に隣接する。東西5 m。南側を溝101に削られる。

30号周溝墓　29号の東に隣接する。西南隅のみ検出。

31号周溝墓　14号周溝墓の東北に隣接する。

32号周溝墓　14号周溝墓の東南に隣接する。周溝は

三方のみであるが東西、南北とも約5.0 mを測る。中央部に長さ2.0 m、幅1.2 m、深さ0.2 mの方形土壙を検出。木棺墓とみられる。

33号周溝墓　17号周溝墓の東に隣接。東西・南北とも5 m。溝101、26～30号周溝墓の間を掘削し、溝幅3.0 m、深さ0.8 mを測る。内部から布留式土器、ナスビ形木製品（鍬）が出土している。

各周溝墓からは供献土器が出土しているが多くは溝底に接するか、わずかに遊離した状態で検出された。時期は第Ⅱ様式から第Ⅲ様式にかけてのものである。壷・甕・水差・高杯・鉢・蓋が検出されている。壷には口縁内側に瘤状突起のあるものが何点か出土している。高杯は上部が杯状のもの、口縁が外反するものがあるが、いずれも第Ⅱ様式期に属し、北摂では類例のないものである。

他に砂礫層などから、須恵器などが出土しているが数は多くない。

所　見

集落の周囲は墓地に囲まれ、南側に水田が拡がっている弥生時代の安満遺跡の景観を復元できる資料を加えることができた。（橋本）

76. 梶原寺跡

所 在 地　高槻市梶原1丁目376－1

調査面積　569 ㎡

調査期間　昭和54年1月26日～2月26日

調査経過

当該地は、梶原寺跡の中心地と目されるところにあり、今回、住宅建設に先立ち発掘調査を実施した。

遺　構

遺構面は2層検出され、上面は、中世の遺構面で、多数のピットや土壙・落ち込みなどが認められた。いくつかのピットの底部に瓦を敷いたものがあり、また、北辺のピットの1つからは礎石状の石を蔵したものがあった。建物としてはベタ柱のものが1棟検出されている。下面は古墳時代前期の遺構面で、土器棺墓などが検出された。

遺　物

中世の遺物としては、包含層から検出された瓦器片や土師器片があり、落ち込みからは、天目茶椀のほぼ完形品が出土している。古墳時代の遺物としては、布留式併行期の壷・甕・高杯などが検出されている。またこの他にも、中世の包含層から、大量の奈良時代の瓦が出土している。これらの瓦は、かって梶原寺に用いられていたものであろう。

所　見

梶原寺の遺構は検出できなかったが、古墳時代の遺構面を確認できたのは成果であった。また、昭和52年の調査につづいて、中世の遺構を検出したことから、現在の梶原村一帯の下層には、中世の集落が埋設している可能性が極めて高いと考えられる。それにしても、奈良時代の遺構面が検出されなかったのは、中世の整地によって、削り取られたためであろうか。今後の調査の課題である。（森田）

77. 梶原埴輪円筒棺

所 在 地　高槻市梶原一丁目37

調査面積　100 ㎡

調査期間　昭和53年2月21日

調査経過

当該地は高槻市東部の解進山東南部に位置する梶原古墳群の一画にあたる。今回、竹藪での筍栽培の土取り作業中に偶然発見された円筒棺について、緊急調査を実施した。

遺　構

円筒棺は墓壙の中央部から検出された。墓壙は現存地で長さ1.25 m、幅0.6 m、深さ0.3 mを測り、主軸の方向は、N－77°－Eである。円筒棺は底部を東側にして埋置されていた。棺の内法は長さ0.53 m、径0.3 mを測り小児用と考えられる。棺内から人骨は検出されなかった。

遺　物

円筒埴輪は高さ77 cm・口径34 cmに復元され、タガは4帯認められる。全体に薄く仕上げられている。また口縁部内向に波状の篦描文がみられた。時期としては4世紀末から5世紀初頭と考えられる。そのほかに墓壙西南部から土師器（甕）を検出した。布留式の新しい段階のものであろう。

所　　見

当該地周辺は6世紀後半の梶原古墳群が所存する地域であり、古墳時代前期に遡る円筒棺が出土することは予想だにしなかった。本遺構と関連するものとしては、梶原寺下層遺跡の集落が考えられよう。とにもかくにも埴輪円筒棺の調査は高槻市域では初めてであり、今後類例の増加をまって、検討されるものである。

78. 梶原遺跡

所 在 地　高槻市梶原4丁目581－2

調査面積　1,483.22 ㎡

調査期間　54年9月13日

調査経過

梶原遺跡は東海道新幹線建設に際して発見され、昭和48年に一部の調査が実施された。その結果では古墳時代前後の遺物包含層と遺構が若干検出されている。今回倉庫建設に先立って試掘調査を実施した。

遺構・遺物

届出地の各所に試掘壙を設けたが、基本的な層序は、盛土（1 m）、旧耕土（0.3 m）、黄灰色粘土（0.3 m）、褐色粘土（0.15～0.2 m）、黄灰色砂質粘土である。黄灰色粘土から中国製白磁・瓦器の小破片を検出したが、遺構はまったく検出できなかった。

所　　見

古墳時代関係の遺構・遺物がまったく検出できず、梶原遺跡の拡がりは案外狭いものと思われる。また、出土した中世の遺物から南の上牧遺跡との関連が考えられる。（橋本）

図　版

弥生式土器の製作実験

a．予熱開始

b．予　熱

弥生式土器の製作実験

a．野焼きベース

b．同　　上

弥生式土器の製作実験

a．おおい焼ベース

b．おおい焼：ベースの上に予熱した土器を横置にならべる

弥生式土器の製作実験

a．おおい焼（ワラ）：土器の上にワラを3層においていく

b．同　上：上面がおわったら側面へワラをたてかける

弥生式土器の製作実験

a．粘土被覆がほぼ終了した段階（ワラ、おおい窯）

b．四隅に点火孔をあける

弥生式土器の製作実験

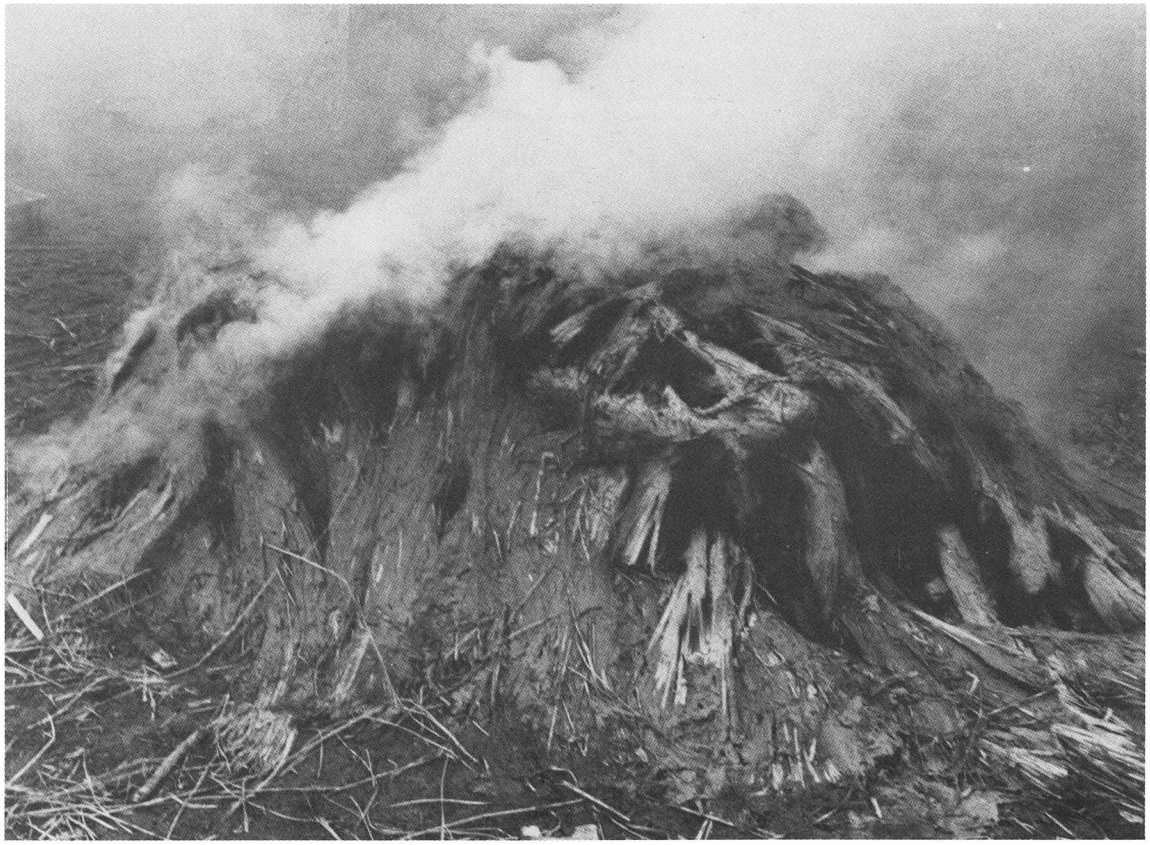
a．点　火：点火孔に細かい木片を投入し点火する

b．点火直後：点火後点火孔をふさぎ上面に煙出孔をあける

おおい焼きおよび野焼き実験風景

弥生式土器の製作実験

a．野焼き：点火後約４０分



b．おおい窯（ワラ）：点火後約２時間

弥生式土器の製作実験

a．おおい窯（ワラ）：底面をかき出す

b．同上（ワラ）：底面開口、直後燃焼旺盛

a．おおい窯（カヤ）：点火後約４時間

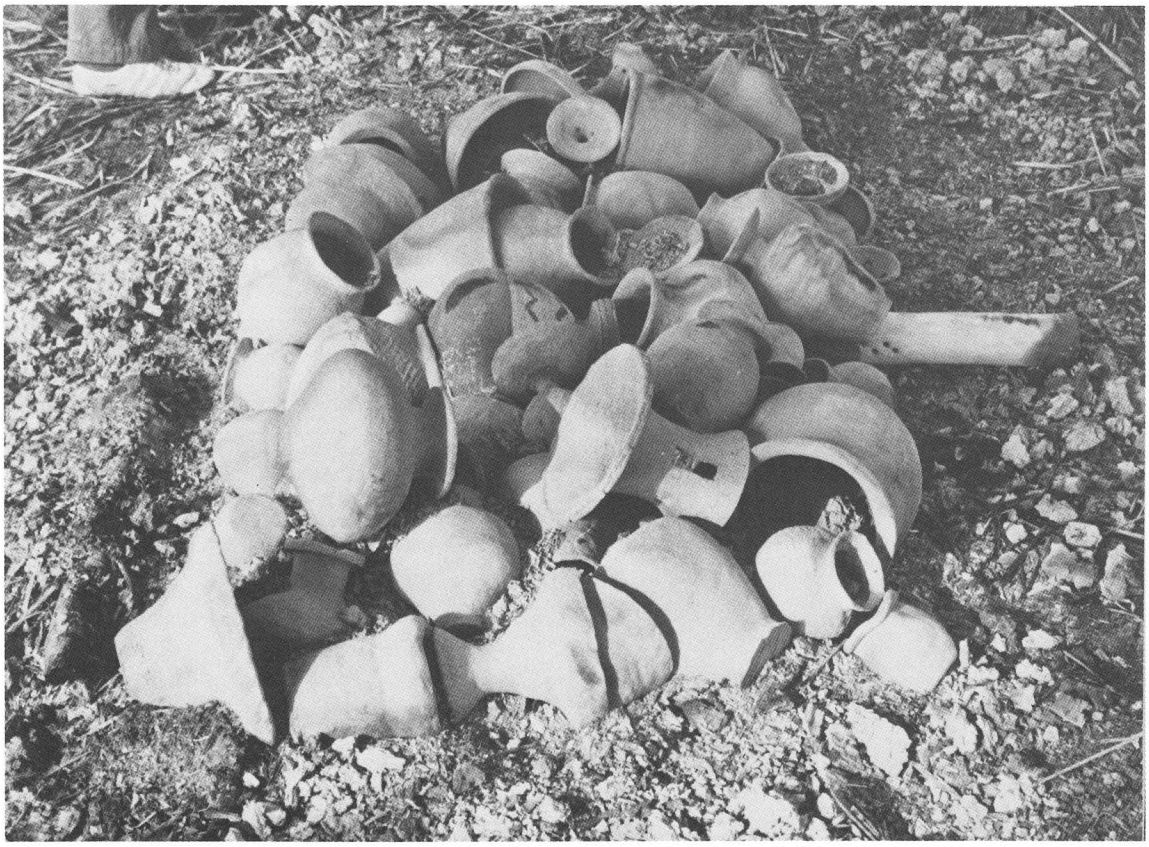
b．おおい窯（ワラ）：点火後約４時間、手前はパイロメーター

a．おおい窯（カヤ）：点火後約8時間（午後9時）ほぼ鎮火

b．おおい窯（ワラ）：点火後約8時間（午後9時）

弥生式土器の製作実験

a．おおい窯（カヤ）：窯体除去前



b．おおい窯（カヤ）：草木灰をかき出し土器を露出した状態

a．おおい窯（ワラ）：窯体除去前

b．おおい窯（ワラ）：窯体除去後

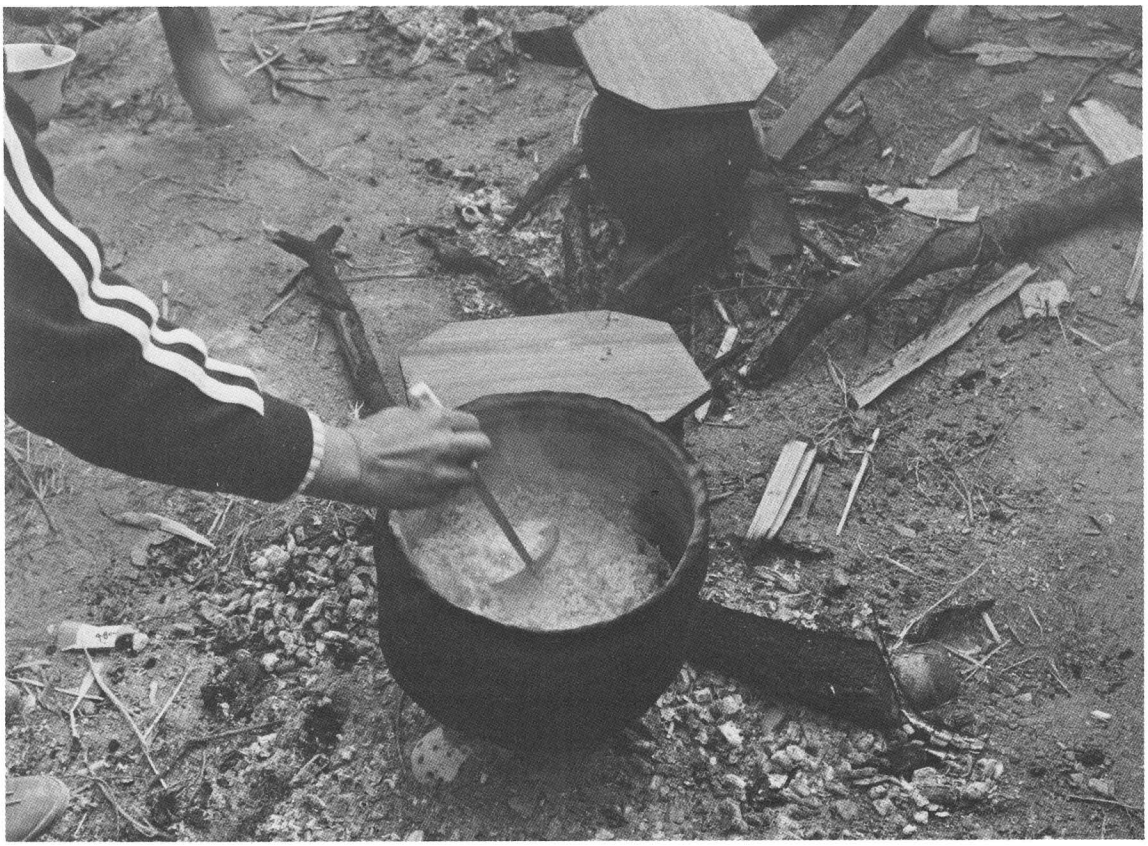
弥生式土器の製作実験

a．おおい窯（ワラ）：草木灰をかき出した状態

b．おおい窯（ワラ）：床面中央の管は温度測定用管

弥生式土器の製作実験

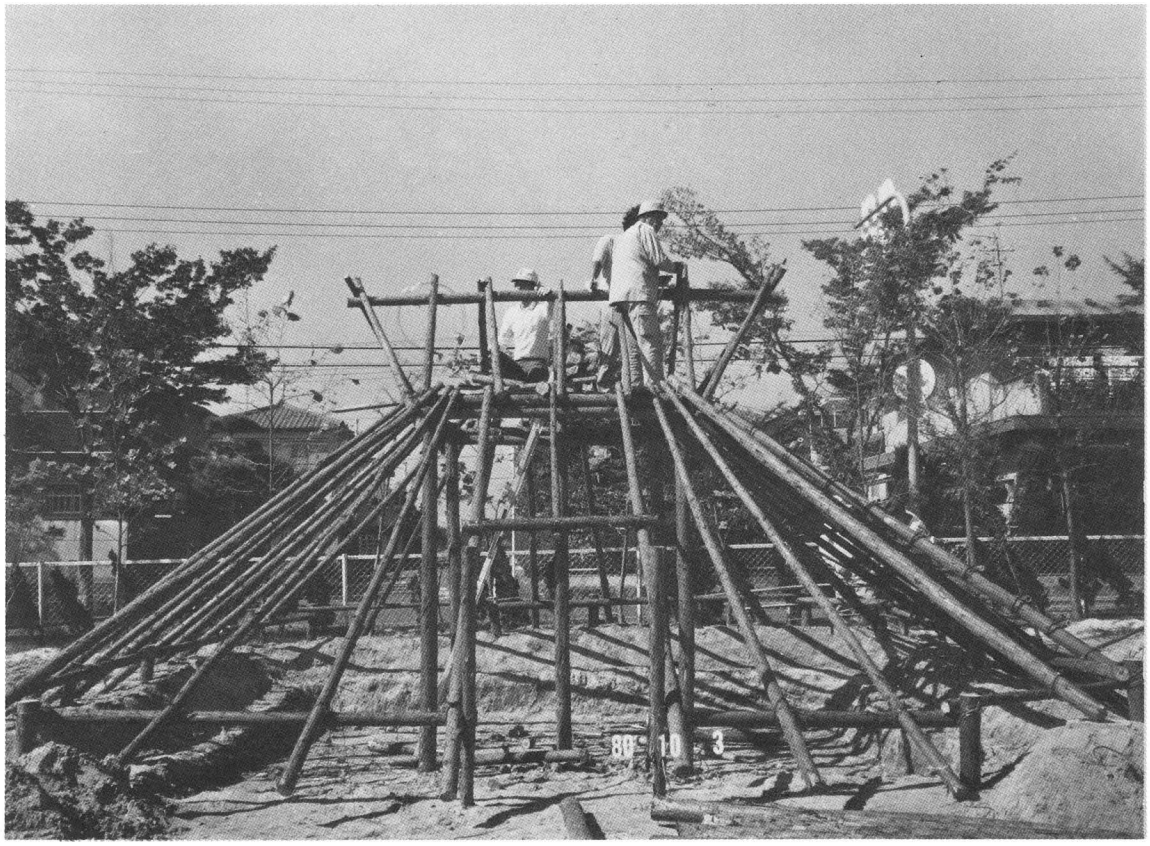
a．調理実験：手前はキビ、奥はアワ



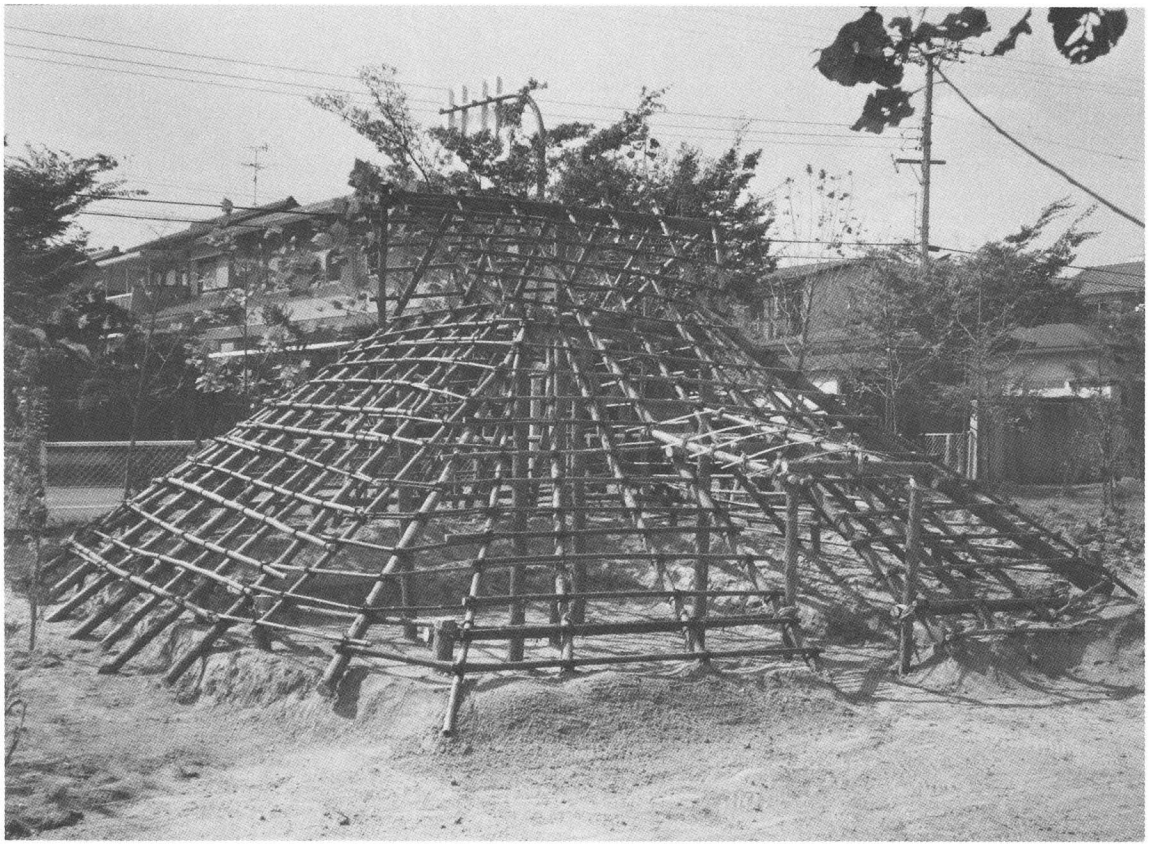
b．同　上：玄米

弥生時代住居の復元

a．床面の掘り下げ



d．屋根の骨組み（1）

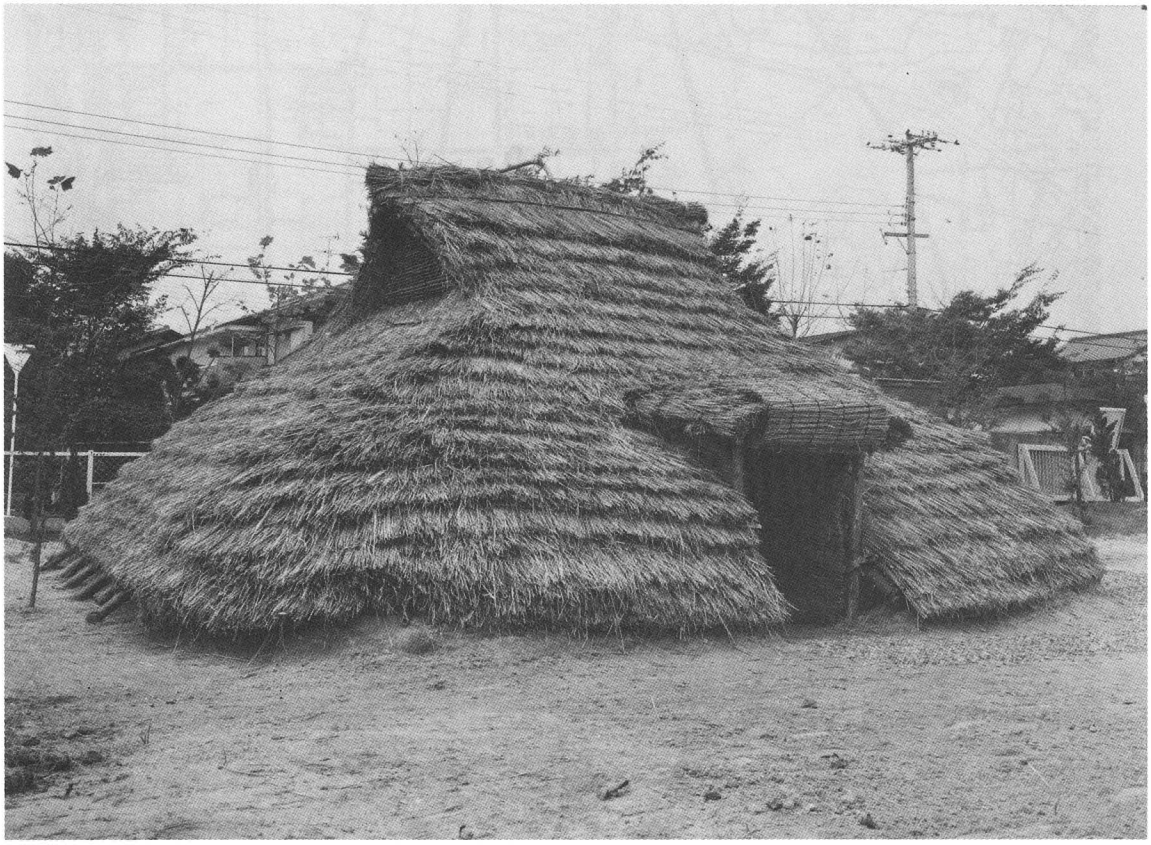


a．屋根の骨組み（２）

b．屋根ふき

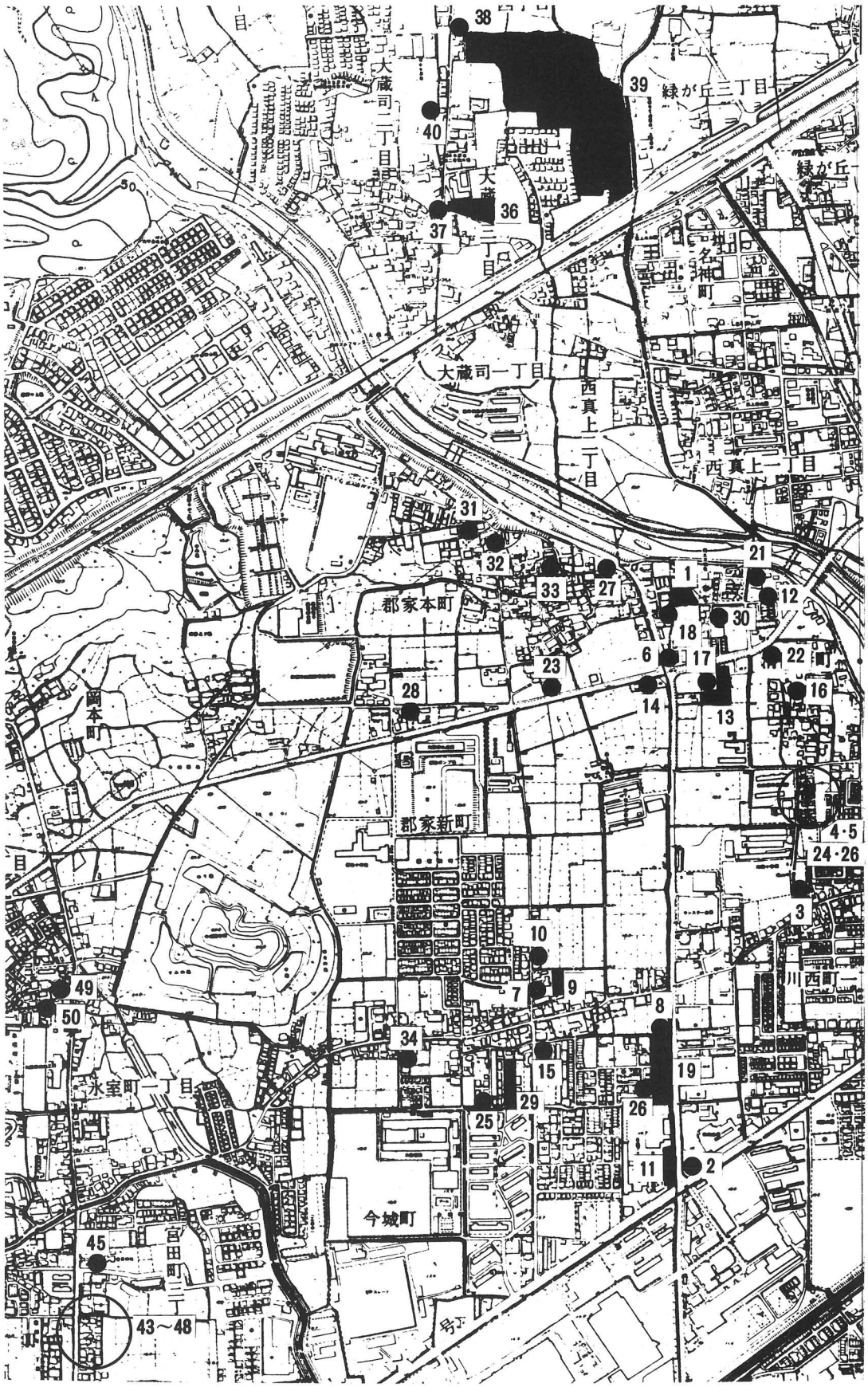
弥生時代住居の復元

a．内　装



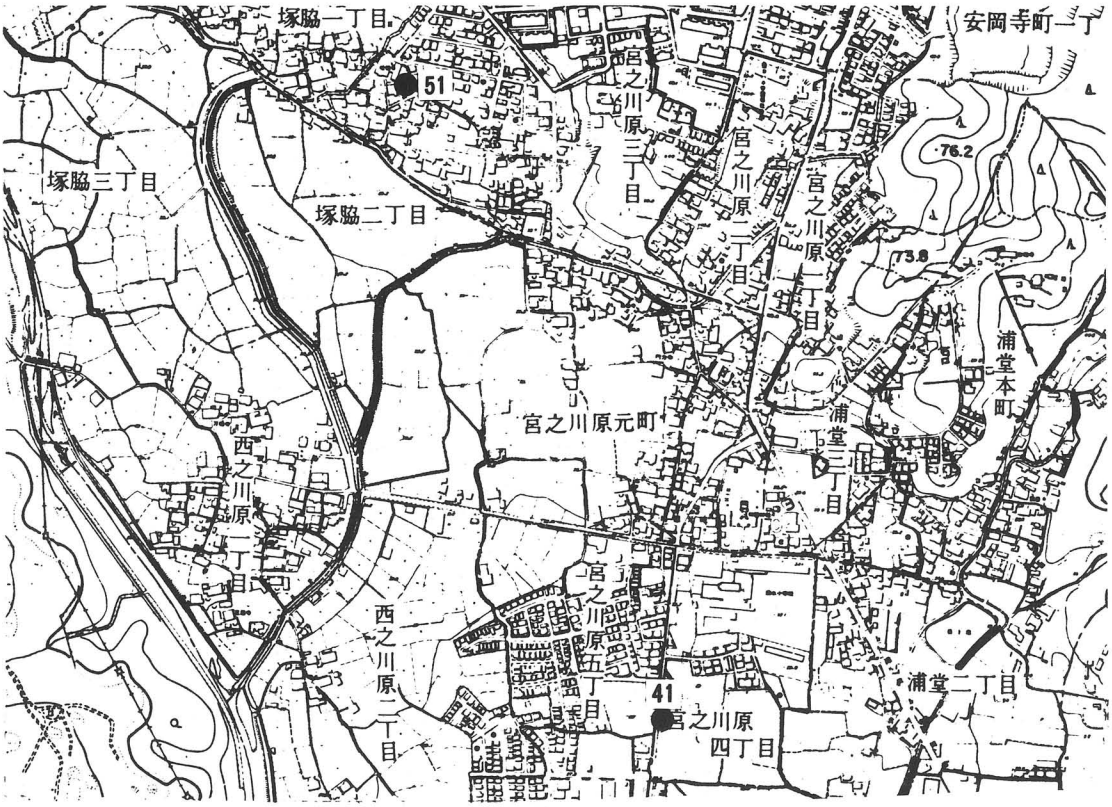
b．完　成

埋蔵文化財調査位置図

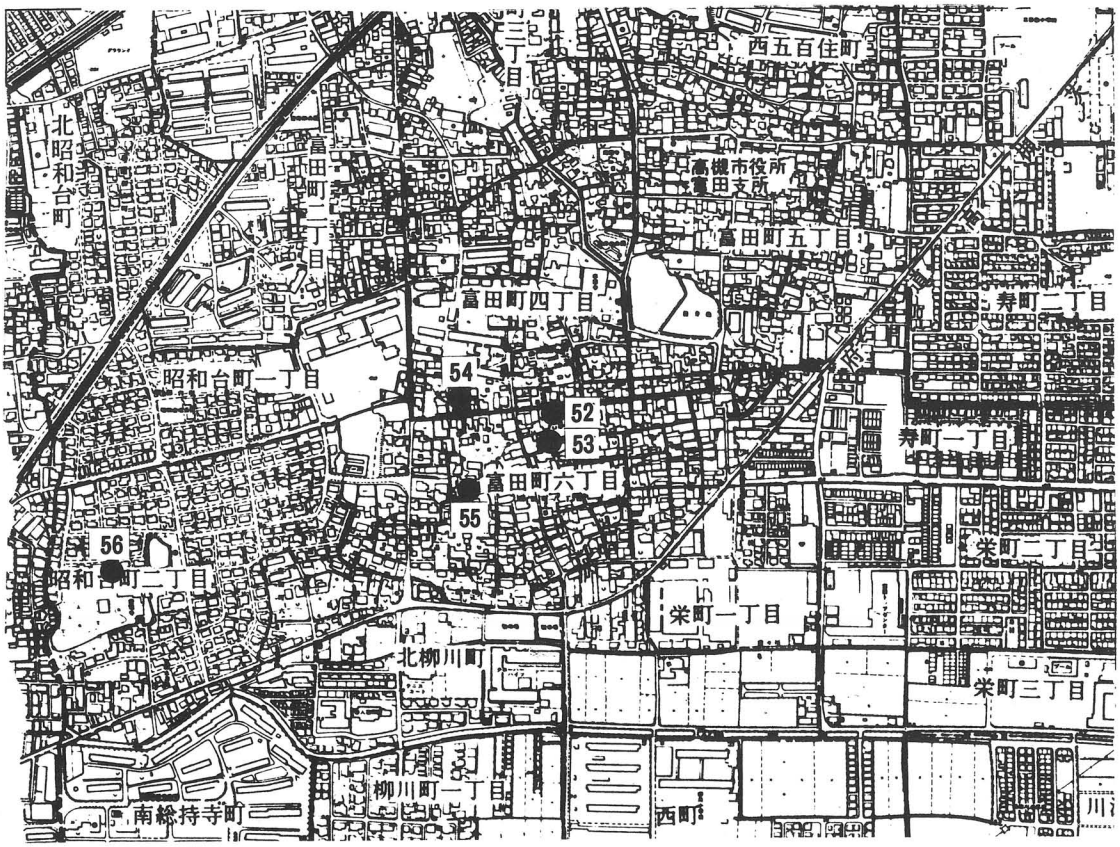


嶋上郡衙跡・郡家本町遺跡・大蔵司遺跡・宮田遺跡

埋蔵文化財調査位置図



a．大蔵司遺跡・塚脇古墳群

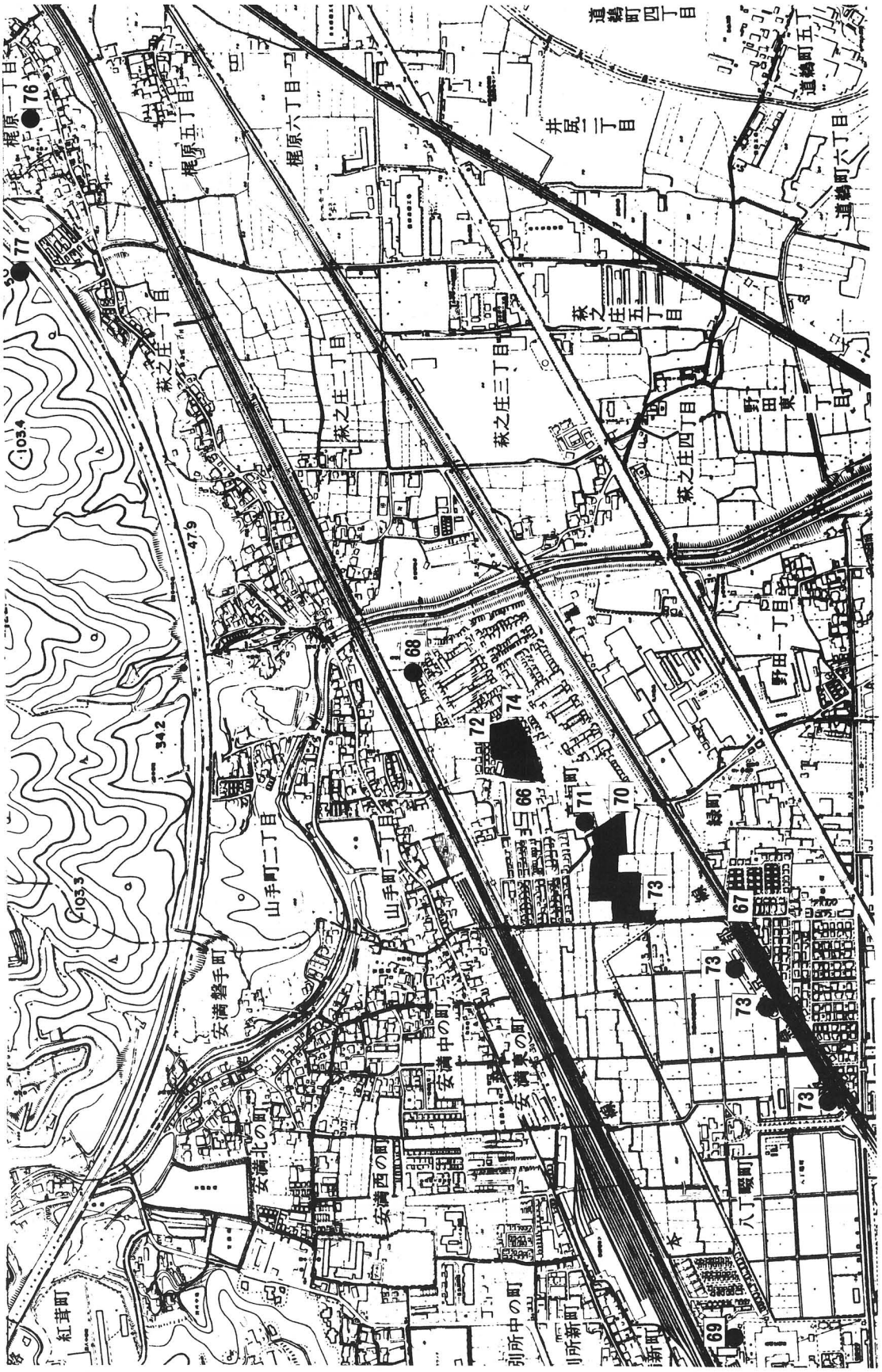


b．富田遺跡・中城遺跡

埋蔵文化財調査位置図

上田部遺跡・天神山遺跡・昼神車塚古墳・古曽部南遺跡

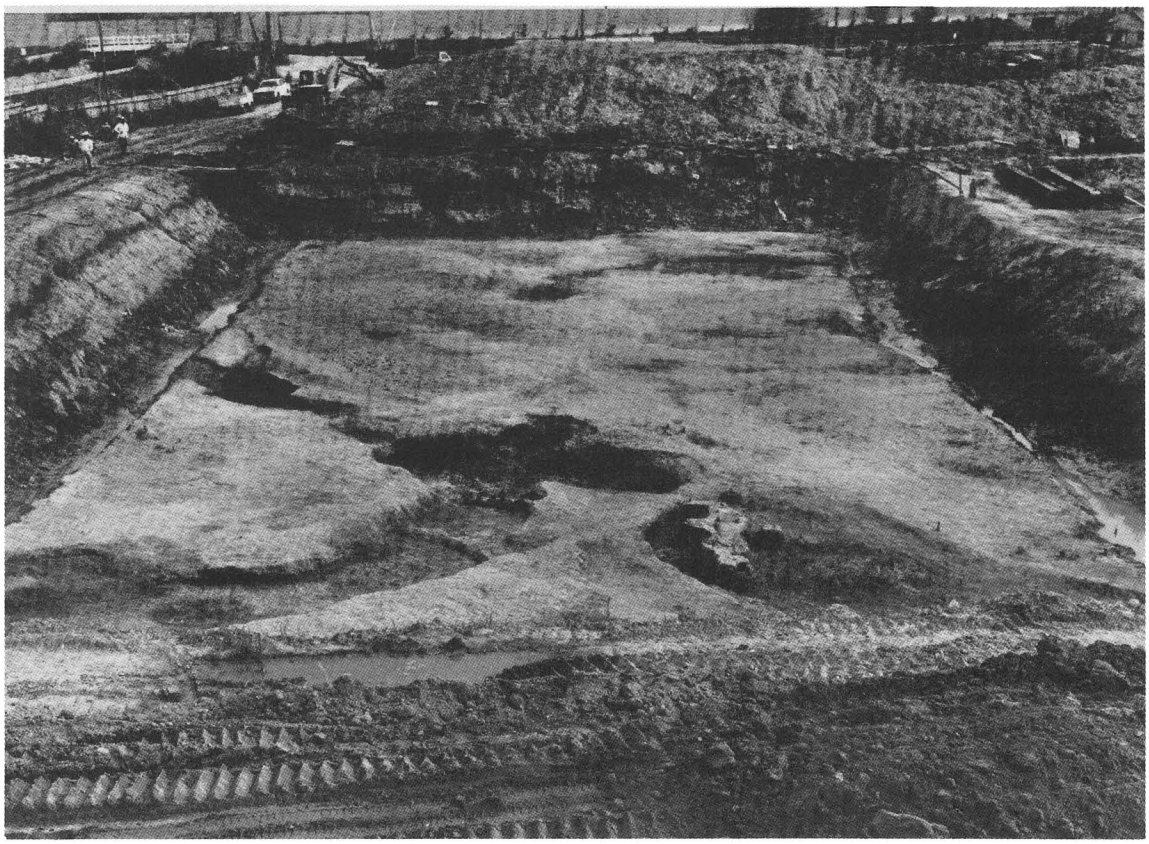
埋蔵文化財調査位置図



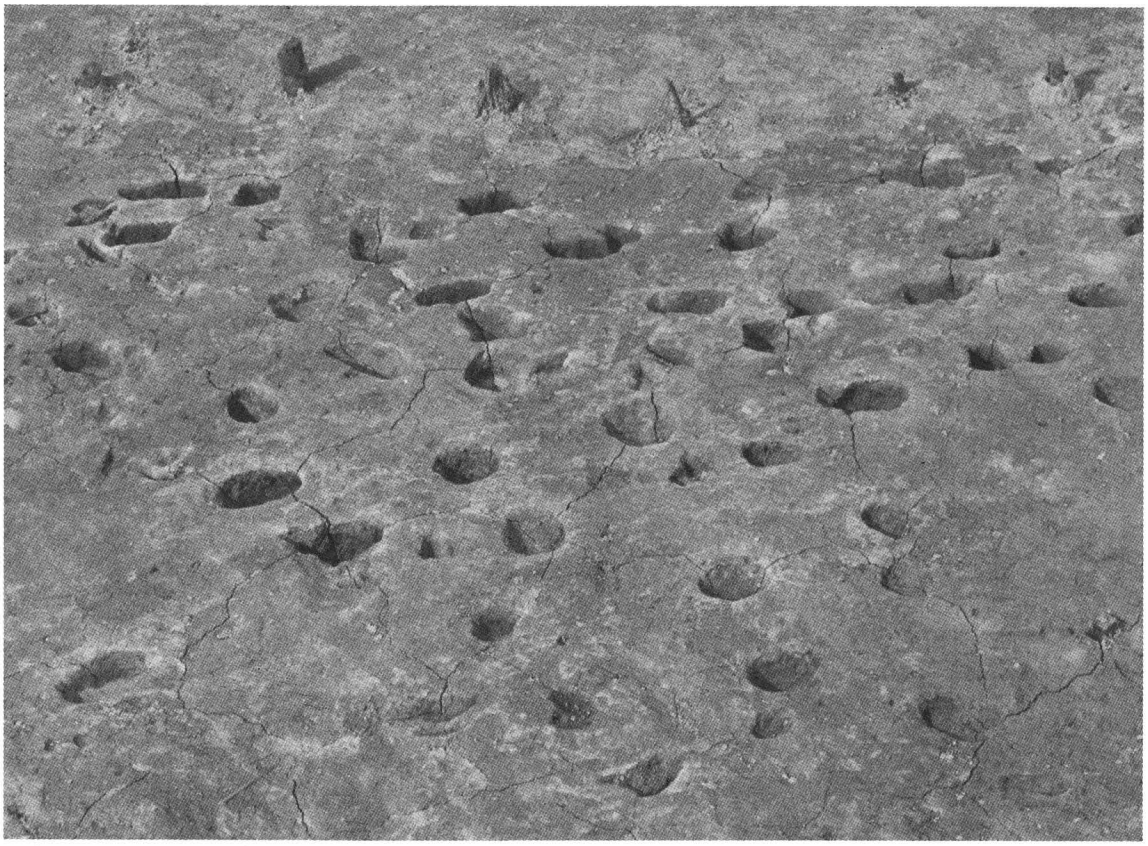
安満遺跡・梶原寺跡・梶原円筒棺

a．（埋３６）調査区東部〔西から〕

b．（埋３６）大溝（弥生時代後期の土器群）



a．（埋３９）調査区全景〔北から〕



b．（埋３９）水田及び牛の足跡

a．（埋５９）調査区全景〔東から〕

b．天神山遺跡遺物包含層出土状況